社団法人　埼玉県経営者協会会報

埼経協ニュース

10・11
'10　月号

明日を拓く ―グローバル化への挑戦―

平成22年度・埼玉経協 モロッコ・スペイン・ブランデンブルク（ドイツ）社会経済視察団

スタジオバーベルスベルク　知事を囲んで

視察団概要

名　称
平成22年度　埼玉経協
モロッコ・スペイン・ブランデンブルク（ドイツ）社会経済視察団

期　間
平成22年10月23日㈯～11月3日㈬

団　員
16名（団員名は別表）

団　長
利根　忠博
当会会長、埼玉りそな銀行シニアアドバイザー

副団長
細沼　哲夫
当会常任理事、日本伸管会長

視察先レポート執筆者

①モロッコのビジネス事情
池田　繁
キヤノン電子　専務取締役

②スペインの産学連携・太陽エネルギー活用事情
高嶋　英一
東京ガス　埼玉支店長

③日産スペイン・インダストリアル・オペレーションの概要
吉野　寛治
吉野電化工業　社長

④バルセロナ旧市街再生事業
岩堀　和久
岩堀建設工業　社長

⑤今も生き続けるガウディのメッセージ
中原　誠
中原建設　社長

⑥県・ブランデンブルク州姉妹提携10周年記念事業
原　敏成
武州ガス　社長

⑦各国観光事情
・モロッコ
三国　雅裕
埼玉県経営者協会　専務理事
・スペイン
三友　哲哉
八千代紡織　部長
・ドイツ
飯野　浩一
公認会計士・税理士

平成22年度・埼玉経協
モロッコ・スペイン・ブランデンブルク（ドイツ）社会経済視察を終えて

埼玉りそな銀行　シニアアドバイザー（当会会長）
視察団団長　利根　忠博

埼玉県経営者協会の海外視察派遣は、毎年時宜を得たテーマを掲げ、会員企業の皆様と共に、話題の地域の視察を実施して参りました。昨年までで32回を数えるに至っております。

33回目となります今回は、投資環境、産学連携、都市再生を主なテーマに、最後の新興市場であるアフリカ市場の現状およびビジネス環境について、ヨーロッパの玄関口であり且つヨーロッパとの関係が深い「モロッコ」を視察することでスタートいたしました。次に、世界的不況が続く中での「スペイン」を再生の切り口から、産学連携、都市再生の具体例を視察、最後に埼玉県と姉妹提携州である「ドイツ・ブランデンブルク州」との「10周年記念事業」に埼玉県と共に参画し、ビジネス面での相互交流および同州の経済・環境面の視察を行うことを目的とし、実施させていただきました。

私からは訪問いたしました視察先全体の感想を述べさせていただくこととし、視察先の詳細に関しましては、各視察団員のレポートをご覧いただきたいと思います。

最初の訪問国である「モロッコ」ですが、アフリカ北西部に位置し、同じアラブ・イスラム諸国との関係に加え、アフリカ、地中海諸国の一員として、これらの国との密接な関係を有すると共に、地理的に隣接するヨーロッパや歴史的に関係の深いアメリカとも良好な関係を有するなど、柔軟で多角的な外交を行っている立憲君主制国家であります。元首モハメッド6世は、1999年即位以来、貧困削減などに積極的に取組んでいることもあり、国民からの人気は高く、政治・社会情勢も安定しております。

次に、経済概況に関して触れさせていただきます。

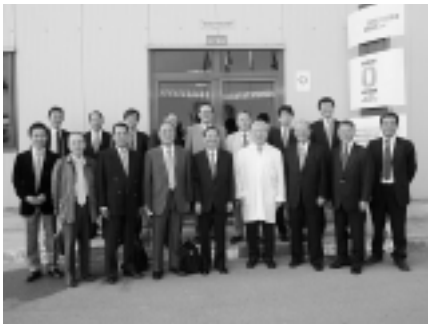
同国は、自由市場経済を採用しておりますが、農業を基盤とし、工業化については漸進的に進めていくという基本政策を採っております。しかしながら、経済のグローバル化に対処するために、民営化や新投資憲章の制定等を行い、民間部門への外国投資の受入拡大を図ると共に、各種投資優遇処置をとるなどして投資環境の整備を実施している状況です。近年では、様々な分野の経済戦略を発表し、次に記載する主な国家開発を積極的に進めております。

○「Vision２０１０」(通称アジュール計画)：国内経済の中心に観光業を据え、外国人観光客数１０００万人達成を掲げたもの

○「Plan Emergence」：繊維等伝統セクターの伸張と自動車部品等の成長セクター開発を主眼においた振興計画

○「Plan MarocVert」：自給自足率向上、農産物輸出高増加を目標とする農業近代化計画

○「太陽エネルギー発電統合プロジェクト」：太陽エネルギー等の再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力）の占める割合を２０２０年には、42％にする計画。



住友電装にて

モロッコでは、カサブランカ・マラケシュ・ラバト・タンジェの各都市を訪問いたしました。

カサブランカは、北は大西洋に面し、モロッコの商業・金融の中心地且つ人口３８５万人の同国最大の都市であります。往年の名画「カサブランカ」の舞台として有名であり、観光地としても多くの人が訪れるところであります。この地におきましては、住友電工・電装現地法人工場（自動車用ワイヤーハーネス製造）を視察させていただき、会社概要・モロッコ投資環境・北アフリカ投資環境についてのレクチャーを受け、活発な質疑応答を行いました。

マラケシュですが、東西２㎞、南北３㎞の城壁に囲まれた旧市街（北アフリカ最大規模）と新市街からなる人口66万人のカサブランカ・ラバトに次ぐ第３の都市であります。世界遺産に登録されたこの都市では、観光事情視察を実施いたしました。

首都ラバトでは、日本国大使館を訪問し、参事官より（大使が出張中の為）ＢＯＰビジネス（ベース・オブ・ピラミッド）の展望を中心に投資環境等のレクチャーをいただきました。

冨永純正参事官と

モロッコの最終訪問地は、タンジェです。人口67万のジブラルタル海峡に面した国際都市であり、タンジェの人々の多くは、対岸のスペインへ仕事にでており、早朝からフェリーの発着する港は、人ひとで活気に溢れておりました。

以上がモロッコの概要ですが、全体の印象としては、今後の投資対象国としては魅力を感じるものの、沿岸都市部と内陸部では、格差（経済面・環境整備面等）がまだまだ大きく、発展途上であると感じました。

次の訪問国「スペイン」ですが、今年の大きな話題としては、南アフリカで開催されたＦＩＦＡワールドカップにて優勝したことをご

記憶のことと思います。一般にはサッカー、フラメンコ等に伴う陽気で情熱的な国のイメージが強いと思われますが、紀元前からの歴史を有し、世界遺産一覧に、文化遺産が34件、自然遺産が2件、複合遺産が1件登録されております。

人口は4700万人の議会君主制国家、元首はファン・カルロス1世、内政上の課題としては、経済回復・テロ・地方自治問題・移民問題を抱えており、外交政策では親米的政策を、日本とは特に、皇室外交を通じて従来よりスペイン王室との間で緊密な交流を行っております。

主要産業は自動車・食料品・化学品・観光事業ですが、2008年以降世界的な金融・経済危機の影響を受け、国内の内需も低迷、2008年GDP成長率は0.9%、2009年も▲3.6%と急減速しております。そのような中でも、政府は財政赤字削減策や金融セクターの再編・健全性の強化、労働市場の柔軟化に着手するなど、経済構造改革を通じた中期的な成長率の確保を目指しているところであります。

スペインには、モロッコのタンジェからフェリーでジブラルタル海峡を横断し、アルヘシラスへ、その後マラガ・グラナダ・バルセロナの各都市を訪問いたしました。

マラガですが、アンダルシア州に属し、人口566千人の紀元前千年頃フェニキア人により建設された貿易都市であります。歴史ある建造物やパブロ・ピカソの生誕地、近隣にリゾート地コスタ・デル・ソルがあることにより、人気のある観光地となっております。

グラナダでは、歴史あるグラナダ大学との交流を通じ、「学園都市における産学連携事例」の説明を受け、我々が抱える問題点に関するディスカッションも含め、活発な質疑応答を行いました。また、世界遺産アルバイシン地区、アルハンブラ宮殿等の見学を観光事業視察の一環として実施いたしました。グラナダは人口237千人、アンダルシア州グラナダ県の県都であり、かつては、イスラム王朝ナスル朝グラナダ王国の都であったところであり、歴史に裏づけされた文化と伝統を維持し続けている都市であるとの印象を強くいたしました。

スペインの最後は、バルセロナです。首都マドリードに次ぐ第2の都市であり、カタルーニャ州の州都、バルセロナ県の県都でもあります。1992年には、オリンピックの開催地となり、現在は人口162万人のグローバル都市となっております。ここには、世界的に知られているアントニ・ガウディの残した建築物（グエル邸・グエル公園・サグラダファミリア等）や様々な歴史的建造物、美術館（ピカソ他）が存在し、その多くは世界遺産に登録されています。スポーツ特にサッカーが盛んで、世界的に注目されているFCバルセロナがあります。

この地においては、まず、日産モトール・イベリカ社を訪問し、会社の概要・当地での労働者を取巻く環境などの説明を受け、工場の見学を行わせていただきました。

次に、都市再生事業に対する取り組みの現場を視察することを目的とし、バルセロナ旧市街振興公社を訪問し、この再開発のテーマである①メディア②IT③バイオ&メディカルテクノロジー④エネルギー⑤文化に関してのレクチャーを受け、質疑応答をした後、現場の視察をさせていただきました。色々と参考になることが多く、有意義な視察であったと思います。

引続きバルセロナ観光事業の視察（世界遺産サグラダファミリアとグエル公園）を行いました。詳細は視察団員のレポートに任せるといたしますが、今回の団員メンバーの中原氏、岩堀氏のご尽力により、余程の事がない限りレクチャーを受けることのできないサグラダファミリア主任彫刻家「外尾悦郎氏」からガウディとサグラダファミリアに関する説明等を受けることができ、大変興味深く・意義のある視察となったことをこの場をお借りしお伝えすると共に、中原・岩堀両氏に感謝申し上げたいと思っております。

日産モトール・イベリカ社
生産ライン

視察団最後の訪問国は、「ドイツ」ですが、ドイツはヨーロッパ中部に位置する連邦共和制国家であり、GDPは世界4位、G7（世界先進7カ国）のメンバーで、フランスと並ぶEU（欧州連合）の中核国となっております。

今回ドイツでは、首都ベルリンとブランデンブルク州の州都ポツダムを視察し、その後、埼玉県とブランデンブルク州との「姉妹提携10周年記念事業」に上田知事・県議会の議員団の方々・県担当者の方々と共に参画し、州関係者および州の企業関係者との相互交流を行いました。

特に、企業関係者とのミーティングは、業種毎のテーブルが設置され、懇親会を兼ねて実施されたので、各々に様々な話題の下、有意義な時間を過ごすことができました。このような場を設定いただいた埼玉県・ブランデンブルク州の関係者の方々に改めまして御礼を述べさせていただきます。

ラルフ・クリストファース州経済・欧州担当大臣方と

最後になりますが、今回の視察では「モロッコ」を通じてアフリカの現状・ビジネス環境を、「スペイン」では、産学連携・都市再生を通じて再生の具体例を目の当たりにし、「ドイツ」では、埼玉県とブランデンブルク州の姉妹提携10周年記念事業を通じて、ビジネス交流を行うことができ、我々経済界としても今回視察したこと全てに真摯に取り組んでいかねばならないと再認識いたしましたことをここに記させていただきます。

結びになりますが、今回の視察団にご参加いただきました会員の方々に心から御礼を申し上げますと共に、視察先でご対応いただいた関係各位の皆様方に改めまして深く感謝申し上げます。

平成22年
埼玉経協

視察団編成事務局報告

専務理事　三国　雅裕

〈視察の狙い〉

33回目となる本年は、最後の新興市場とも言えるアフリカの現状を、ヨーロッパからの玄関口であるモロッコを通じ探ることを皮切りに、世界同時不況の中、スペインの苦悩と再生、とりわけ産学官連携の取り組みと都市再生の状況、そして埼玉県と姉妹提携先であるドイツ・ブランデンブルク州との「姉妹提携10周年記念事業」に参画するなど、盛りだくさんのテーマを掲げ、今後の企業活動はもとより、埼玉県経済の活性化に活かすこと、そして、これらを協会事業に反映していきたいと考え視察を企画した。

〈視察先の選定〉

視察先は以下の視点で選定した。

1．最後の新興市場であるアフリカ・モロッコ市場の現況

①住友電工・電装グループ会社ベラシット工場

イタリアやドイツを中心とした欧州自動車メーカーに、ワイヤーハーネスを供給する生産拠点。モロッコ国内に3か所の工場を有する。ビジネス環境を視察する。

②モロッコ大使館

アフリカは膨大な資源埋蔵量と10億人の人口を誇り、BOP（ベース・オブ・ピラミッド）ビジネスで世界から熱い視線を浴びている。モロッコは、ジブラルタル海峡を挟んでアフリカと欧州を結ぶ地政学的に重要な位置にある。また歴史的に中東諸国とも強固な関係を持っている。モロッコを中心に、アフリカの投資環境、治安等BOPビジネスの可能性を探る。

＊BOPビジネス：開発途上国の低所得層を対象としたビジネス。

2．スペインの産学官連携と都市再生・エネルギー・環境事情

①グラナダ大学

1531年にスペイン第3の大学として、設立された国立大学。グラナダの人口約24万人の内4分の1がグラナダ大学生といわれており、活気に溢れている。

大学、ビジネス財団や市、産業界等の連携、とりわけイノベーション・教育・雇用の取り組み状況の確認と意見交換により、県経済の活性化に活かす。

②日産モトール・イベリカ社

日産自動車の欧州生産拠点。自動車産業を中心にスペインの産業状況を確認する。

③バルセロナ地域開発エージェンシー

バルセロナ都心部の東側の中小工場が集積した工場地域200haを再生し、産業構造の転換を図るプロジェクトは、「バルセロナ・モデル」として世界的に高い評価と関心が集まっている。都市再生プロジェクトのテーマは①メディア、②IT、③バイオ&メディカル・テクノロジー、④エネルギー、⑤文化、の5分野。

再生事業資金の9割以上を民間に依存しつつ、行政が強い影響力を発揮する仕組みなどを視察する。

3．ドイツ・ブランデンブルク州との相互交流

「ブランデンブルク州経済大臣との懇談」・「埼玉県・ブランデンブルク州経済セミナー」更に「懇談会」など「県とブランデンブルク州との姉妹提携10周年事業」に参画し、相互交流を図る。

4．各国の文化・観光事情

観光の先進国であるスペイン・ドイツ・モロッコの観光資源や文化を観察吸収する。

〈視察団の編成〉

このような経済情勢の中、視察目的に賛同し御参加いただいた方々は、別掲の15名に私を加えた16名で編成。結団式の折に、団長、副団長、視察先のレポート執筆者を選出した。

〈視察の成果〉

視察各地の専門的な内容や成果については、レポートをご担当いただいた方々より、詳細にご報告いただいておりますので、そちらにお任せするとして、ここでは私の感じたことを思うままに随筆させていただく。

1．モロッコとスペインに見るイスラム文化
―イベリア半島はアフリカの続き？

モロッコはマラケシュやフェズに代表されるように、イスラム文化が今も引き継がれている。そこでスペインだが、モロッコから見ると、ジブラルタル海峡を挿み14㎞先がスペインとなる。翻って考えてみると、イスラム教徒は711年に、モロッコのタンジェからこの海峡を渡り、イベリア半島に進出し、船で遡れる川のほとりにグラナダやセビリア、コルドバ等の都市を築いてきた。

1492年のキリスト教徒によるグラナダ陥落までの約800年は「イスラム文化が最高に美しく花開いた時代」。だからこそスペインは世界遺産の数がイタリアに次いで第2位。今回視察した「アルハンブラ宮殿」などのイスラム文化がベースになっており、正に、キリスト教内のイスラム・アフリカ文化であり「文化の十字路」。と言うことからすると、モロッコを主語にすると、スペインはジブラルタル海峡を挿んだ続きとなる。

アルハンブラ宮殿　アラヤネスの中庭

2．モロッコでの日本の影響力は？

モロッコ大使館の冨永純正参事官は、モロッコと日本について「中国はローテクによるきめ細かな売り込みを行い成果を上げている。韓国は石橋があれば行ってみる行動力がある。かつてはモロッコの自動車はヨーロッパ車以外では日本オンリーだったが、今では、日本のハイテクだけでは太刀打ちできない状況」と語っていた。

経済面での影響力について、一例を上げれば町の広告看板がある。これについてはキヤノン電子の池田専務のレポートで韓国勢等の広告の勢いについて触れておられるが、私も全く同じことを思った。

ただし、そういう中でキヤノンの広告は見つけることができたことを申し添えておきたい。

3．スペイン人は働きだしたか？

グラナダ大学では、大学幹部、財団役員、商工会議所会頭、市役所幹部など総勢11名が、歴史的価値の高い会議室で迎えてくれ、私どものアジェンダに真摯に対応いただき資料も沢山頂戴した。その後のディスカッションも活発に行われた。心から関係者に感謝したい。

一方、スペインというとシエスタ（午睡）といって、昼寝ばかりしていると思っていたが、そうでもないらしい。最近は、シエスタといっても15分位椅子に座ってじっとしている程度ですよとガイドが話していた。これもスペイン再生への意気込みか？？？

4．サグラダファミリアは教育の場

中原氏が詳細なレポートをお寄せ下さったので、そちらをご覧いただきたいが、外尾氏が「サグラダファミリアは世代を引継ぐ学校。人間をつくるために創っている」との言葉が鮮明に残っている。

5．ドイツの文化と風景

①ベルリンフィル

10月30日の土曜日に、ベルリンフィルのコンサートを鑑賞した。指揮はフィルの首席指揮者である「サイモンラトル」。

マーラー生誕１５０年でもあり当日の演目は

○シェーンベルクの「ワルシャワの生き残り」

○マーラーの交響曲第2番「復活」

忙中閑。サントリーホールの手本になったと言われている「フィルハーモニー」での貴重な週末、心身ともにリフレッシュ。

②グリニケ橋とポツダムの黄葉

ベルリンからポツダムに向かう途中、東西ドイツの分岐点「グリニケ橋」がある。私たちは徒歩で橋を渡った。かつてはスパイの交換が行われるなど、映画化もされている。今ではこの先のポツダムはベルリン近郊の高級住宅街となっている。

ツェツィーリエンホーフ宮殿にて

それにしてもポツダム周辺は一面黄葉に包まれ絵葉書のような美しさであった。ポツダム会談の舞台となった「ツェツィーリエンホーフ宮殿」やフリードリッヒ大王の夢の宮殿「サンスーシ」など印象に残る。

6．ブランデンブルク州での草の根外交

州経済大臣との懇談の折、利根会長がワールドカップ第3位の祝意を述べると、挨拶の途中で経済大臣がすぐに反応し、感謝の意を表していた。その後の交流会でも団員メンバーが先方の経済人に囲まれるなど、熱心なプレゼンを受けた。知事のブログには「経営者協会のメンバーがモテモテだった。やはり経済が現実を引っ張っている」とある。少しはお役に立てたと思う。団員並びにこの日一日のために来て下さったサイデン化学の籠島社長、田中常務にはこの場を借りて御礼申し上げたい。

7．雑感

①スペイン視察の幸・不幸？

○アルハンブラ宮殿の川崎さん

世界遺産「アルハンブラ宮殿」をガイドしてくれたのが、スペイン人の自称「川崎さん」。どこまで日本と関係があるかは不明だが、吉本並みのオヤジギャグの連発。聞けば、日本の旅行番組にも出たそうな。

○ＦＣバルセロナ専用バス

バルセロナの移動は、ＦＣバルセロナの専用バス。行く先々でシャッターの嵐となる。そういえば、視察先の講師の人がバスに同乗したが、こっそりと後部座席に移動していた。サロンの雰囲気を味わっていたのだろう。団員の多くが、バスを背景にシャッターを押したのは勿論だ。

②ローカル料理と日本の味

各国それぞれのローカル料理を、ボリュームには圧倒されつつも、楽しく、かつ美味しくいただいた。ドイツでは、肉料理とりわけ「ヴィーナーシュニッツエル」（子牛のカツレツ）を堪能した。半分はそのままで、残り半分は、メンバー持参の「日本のソース」で食べた。この風味の懐かしさと美味。

百通りの食材があれば百通りの味を引き出す「日本の醤油とソース」は、日本人としてのアイデンティティか？

結びに

私たちは昨日より今日、今日より明日が良くなることを確信して生きてきた。不幸にして我が国の昨今は、今日より明日が悪くなるのではないかという未来が必ずしも展望できない状況にある。これに比べてモロッコは、我が国が経験したと同じように、新興国として今日より明日が良くなるだろうと思うし、それだけのパワーも感じた。

19世紀はヨーロッパの時代（産業革命）、20世紀はアメリカ（技術文明）、21世紀はアジア太平洋の時代とも言われる。そのアジア太平洋の時代の中で、リーダーシップを発揮できるかどうかは、グローバル化への対応次第で決まると思う。一例を上げれば、アフリカに見る中国や韓国の戦略、この違いを如何に縮めていくかにかかると考える。この視察を通じ、島国日本に閉じこもっているだけでは、明るい未来は開けない。では何をなすべきか、今後の協会の重点テーマとしたい。

最後に、私どもの視察を温かく迎えていただき、ご協力賜わった方々に、重ねて衷心より感謝を申し上げたい。併せて、事務局の不行き届きにも、高い見地からご理解いただいた団員各位に御礼申し上げたい。

欧州市場の一大拠点として変貌しつつあるモロッコ その実情について視察する

キヤノン電子
専務取締役　池田　繁氏

ジブラルタル海峡を挟んで、欧州との玄関口であるモロッコは、国内市場の開放と外国投資の誘致を図る事で、国内経済の活性化と、雇用促進を積極的に取り組んで来ており、今や拡大するヨーロッパ市場の、一大拠点へと変貌しつつある。今回はその一つである欧州自動車メーカーへの、ワイヤーハーネスの生産拠点の実態とビジネス状況について視察して来た。

カサブランカを訪ねて

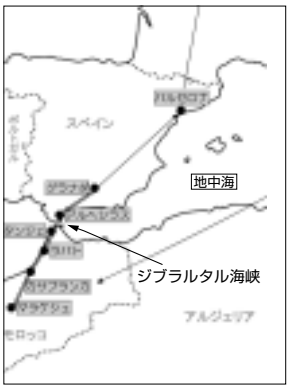
モロッコ第一の商業都市カサブランカに、最初に降り立った時の第一印象は、砂漠の国、アフリカ、発展途上国のモロッコ、というイメージではなく、砂漠のオアシス、美しいヨーロッパの国、道路の街路地、分離帯等緑にあふれており、昔同じフランス領であったアジア、ベトナム、ハノイ市とは全く違い、本当にアフリカへ来ているのだろうかと思った。

バスの車窓から街中を見ると、車が溢れており、第一にフィアット、ルノー、フォルクスワーゲン、韓国の現代、起亞、残念ながら日本のトヨタ、日産はほとんど見られず、家電メーカーの広告は中国メーカー、LG、サムソン電子等韓国勢が多かった。

住友電工Gベラシッド工場（カサブランカ郊外）訪問

住友電工Gはワイヤーハーネス工場をポーランド（2000年竣工）とモロッコ（2006年竣工）に持ち、欧州各自動車メーカーへ供給している。

ポーランド工場　12、500㎡
モロッコベラシッド工場
　43、722㎡
カサブランカ工場　26、500㎡
アインゼ工場　14、400㎡
作業人員　合計　4、576人



更に、ワイヤーハーネスはすでに東欧から、北アフリカ、モロッコへ主力部隊は移っており、モロッコ国内に点在する欧州自動車メーカー各社（フィアット、ルノー、フォルクスワーゲン等）へ供給している。ジブラルダルを渡り、欧州各国の本体生産拠点へも送り出されている。

製造内容

被覆電線（購入）を機種ごとに切断機、皮むき機、端子付け又は溶接等がライン編成され、最後に束線組立が人手で行われていた。

リードタイム

リードタイムは3日、非常に短く材料庫、生産ライン、完成品庫が一直線上に配置され、さすが自動車メーカーと云う感がした。

物流

3工場共にカサブランカの近くに位置し、完成品はモロッコ北部の町、タンジェに運ばれ、そこからジブラルタル海峡を渡り、欧州の各メーカーへ送られている。

就業状況

勤務体系は　機械工場　3直
　組立工場　1直
・賃金　2万円／月
　ワーカー　120円／時
技術系　4～5万円以上／月
・離職率　5％
・ストライキ
一昨年の不況時8000人→4000人へカット、賃上げは2年ごとに改訂していたが、4年間改訂がなかった。これらが原因で、ストライキが発生したが、今はない。

インフラ

停電についてはほとんどないと云う事で電力不足の場合、欧州特にスペインから電力を購入している。

海外投資企業に対する特典

①ハッサン2世基金

2億ディラハム（1ディラハム＝10円）以上の投資、又は200人以上の雇用創出を予定すると、政府から分担、援助金が適用できる。（土地50％建屋30％設備5％）

②協定

2億ディラハムの投資の約束をする企業は政府との協定を以って投資の一環で必要な設備、工具調達に免税措置を取ってもらえる。

③フリーゾーン特典

タンジェ、ラバト、カサブランカ市等にフリーゾーンと呼ばれる税特典地区がある。

・輸出、設備、原材料の免税2.5～50％
・原材料、製品及び屋内調達原材料に於いて付加価値税免除

④法人税

一般は30％であるが、輸出業務は創設後5年間は、免税、更に5年間は17・5％が適用される。

こう云ったモロッコ政府の外資導入の優遇措置があり、住友電工をはじめ、欧米、中韓印等多くのメーカーが積極的に活用しモロッコに進出している。

欧州自動車メーカーの動向

東欧の人件費高騰、労働争議等で更にコスト競争力を高める為、北アフリカ（モロッコ、チュニジア）中近東（エジプト）へ進出を始めており、モロッコでは欧州メーカー基軸に最近では韓国、現代起亞が活発に展開、特に韓国は自動車だけでなく、白物家電、電子

機器製品へLG、サムソン電子が猛勢をかけて来ている。一方日本勢は、街中にトヨタが販売店をと云うぐらいで、自動車、家電共に活発な動きは聞こえて来なかった。

モロッコ日本大使館を訪問して

冨永純正参事官、上尾敬彦一等書記官等から話を聞く事が出来ました。アフリカは2000年に入り、急成長を始め、この成長を支えているのが、①新しく台頭した中間層と呼ばれる購買層、②低所得者層にも手が届く価格帯商品の出回り（中国商品等）により、新しい低所得者購買層の広がりが生まれる。

この動きが南アフリカ、ナイジェリア、北アフリカ等に広がり、期待できる労働人口とアフリカ消費市場を求めて、欧米、中韓印企業が積極的な展開を始めている。一方これから進出しようとする日本企業は、先行するこれら欧米、中韓印企業との間で厳しい競争が強いられる事となるだろう。

この動きはモロッコでも同様で、比較的安価な労働力の確保と欧州に近いという事。更に最近ではモロッコ政府が経済特区、税制の優遇措置等海外よりの投資環境の改善を図った為、益々盛んになっており、ここでも欧米、中韓印の各社が活発に進出している。

現在進出している日系メーカーは20社である。

・ワイヤーハーネス：住友電工、矢崎総業、フジクラ

・衣料用ファスナー：YKK

・事務所：三菱商事、伊藤忠、住友商事、双日、マキタ等

モロッコ大使館にて

モロッコの人口は3000万人、うち労働人口は1900万人、40%は農業であり、平均年齢23歳と非常に若い。

又、産業もリン鉱石を中心としたリン酸等の化学産業と観光業が中心であったが、最近は自動車、IT、電子機器等の製造業も盛んになりつつある。

各種開発計画

①再生可能エネルギー分野

「太陽エネルギー発電統合プロジェクト」…太陽エネルギー利用による発電容量を2000Mw、年間発電量を4500Gwhまで増加し、2020年に於ける発電容量のうち、再生可能エネルギーが占める割合を42%（うち太陽光14%　風力14%　水力14%）とすることを目指す。

「風力発電統合プログラム」…現在の280Mwから2020年までに2000Mwの発電容量を実現し、年間発電量を6600Gwhとすることを目指す計画。2010年11月29日発表。

②観光分野

「VISION2010」…外国人観光客を2010年までに1000万人とする目標を掲げた計画。2001年発表。

観光客数は2001年の422万人から2009年の834万人まで順調に増加している。

③工業分野

「plan Emergence」…繊維等伝統セクターの伸張と自動車部品等の成長セクター開発を主眼においた振興計画。2005年発表。

「plan National pour Industrielle」…雇用創出、工業分野のGDP増加、輸出増加等を目標とする産業振興のための国家プログラム。2009年発表。

④その他

・フリーゾーン、経済特区を中心とした開発計画が活発化

◎地中海港、ジブラルタル海峡の玄関口タンジェの街とラバト、カサブランカを結ぶ自動車輸出用フリーゾーン計画

◎タンジェ地中海港とルノー工場を結ぶ鉄道輸送計画

◎日産イベリカ、タンジェ進出計画（現在凍結中）

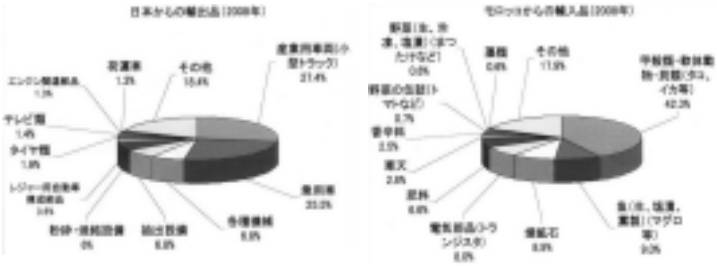
◎アカディールにトヨタ自動車の新ショールーム　9月オープン

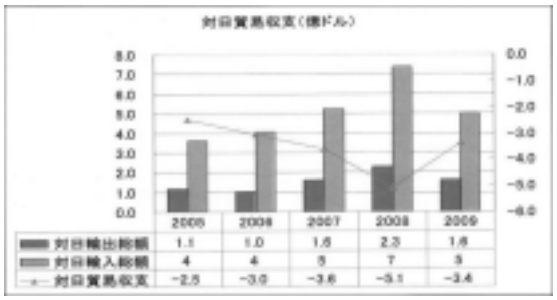
トヨタ、ダイハツ、スバルの自動車展示場開設

日本との経済関係

①貿易

2008年における貿易総額は約10億ドル、2005年以降、年平均20%程度の増加率だった。2009年は世界経済危機の影響で大幅減だが、今後はまた増加を続けると予想される。2003年以降、タコの資源減少に伴いモロッコからの輸入高が急激に減少した。日本からモロッコへの輸出は自動車中心。





②無償資金協力

今年1月、日本とモロッコとの間に、6億4000万円の環境プログラム無償資金協力『太陽光を活用したクリーンエネルギー計画』に関する書簡の交換が行われた。

以上　これまでに述べたように、モロッコ、北アフリカ地域での日本勢の進出の遅れは欧米、中印韓国メーカーに比べると異常な位劣ると云える。今後の世界の発展途上国への進出が求められる中、長期計画ビジョン、FTA等を含めて早急に立案する事が必務と思う。日本の企業、経営層、もっと頑張らなくては、と云う強い思いを残してモロッコを後にした。

スペインの産学連携・太陽エネルギー活用事情について

東京ガス㈱
埼玉支店支店長　高嶋　英一氏

1．はじめに

今回訪問したモロッコ・スペイン・ドイツの3カ国で印象的なことの一つが「天候」である。モロッコ・スペインは太陽が燦々と輝き、まるで10月末とは思えない天気であった。一方、ドイツ（ベルリン）は雲が厚くどんよりとしており、かつ風もそれほど強くなく、太陽エネルギーや風力とは「あまり」結びつかないという印象であった。

今回のレポートは題にある通り、主にスペインについて記載するが、関連する部分についてモロッコの事情なども織り交ぜたいと思っている。EU内の大国であるドイツ・スペインとモロッコとの関係も個人的には大変興味深いものがあり、特にエネルギー戦略といった面について取り上げたい。

2．スペインの産学連携の状況

今回訪問した南スペインのアンダルシア州にあるグラナダ大学は、1531年にスペインで3番目に設立された17学部を要する総合的な国立大学である。グラナダ市の人口約24万人の4分の1に当たる約6万人がグラナダ大学の学生と言われ、500年近い歴史の古さと、その規模の大きさに圧倒される。

10月27日当日は大学本部において、グラナダ大学ビジネスセンター、グラナダ商工会議所、グラナダ経営者協会、ビジネスイノベーションセンター、グラナダ大学ビジネス財団、アルメリア県太陽熱発電設備メディア担当等、大勢の方々にお出迎え及びプレゼンテーションをいただき、今回の視察訪問への関心の高さが伺えた。プレゼン・質疑応答合わせ9時開始から3時間を超え、大変充実した視察であった。以下にその概要を記載する。

グラナダ大学にて

・グラナダ大学としては、商工会議所も含めた企業団体と一体となって経済開発に取り組むことが必要だと考えており、そのための質の高い人材や知識を多く企業に届けることが一番の役割だと認識している（グラナダ大学ビジネスセンター Antonio Lopez 氏）。

・商工会議所としては、各種セミナーの開催による海外の事業環境の紹介、国際見本市等への地元企業参加への同行等に力を入れている（グラナダ商工会議所会頭 Javier Jimenez 氏）。

・経営者協会は1977年に設立され、自由参加を原則とする「企業家の利益を守る」組織である。中小企業も含め、より多くの企業の参画を促すとともに、大学や各種団体との関係構築を積極的に行っている。その他、中央政府との関係構築、アンダルシア州の経済計画策定にも関わっている（グラナダ経営者協会事務局長 Salvador Frutos 氏）。

・ビジネスイノベーションセンターは、州政府所属の組織である。目的は新たな革新的企業の創造、企業に新しい空気を吹き込むことである。具体的な活動としては、企業のビジネスプラン策定支援、研究開発前段での活動サポート、財政面や人的資源についてのサポート等を行っている（コーディネーター Valentin Pedrosa 氏）。

・グラナダ大学ビジネス財団は、大学と企業との橋渡しを目的としている。大学内にオフィスを構え、大学の総長が会長を務め、商工会議所や経営者協会もメンバーとして参画している。主な活動としては、企業と大学スタッフを結びつけること、企業が求める各種講座の開催、学生の就職支援等である（財団役員 Maria Dolores Genaro 氏）。

その後の質疑では、以下の3点について質問し、回答いただいた。

①（大学として）産学連携の一番のキーポイントは何だと思うか

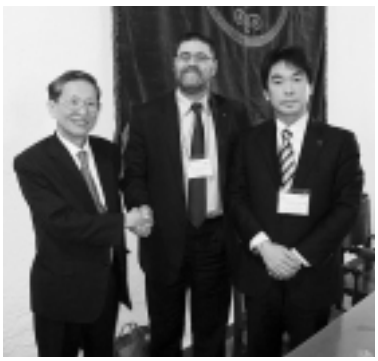
②（これまでの）グラナダ大学と企業との産学連携での具体的な成果は何か

③今後の産学連携での課題は何か

①については、緊密な人間関係を構築することに尽きる。その上で企業が必要としていることに対する回答を出すこと、企業の具体的な要望にきっちりと応えることが重要である。企業を自分達のパートナーとして、大学自らが近づいていくことが必要である。

②については、例えば乳製品を製造しているPRVAという企業がある。大学と共同開発したオメガ3脂肪酸を活用した商品がある。また、アルツハイマー病に関する共同研究も大きな成果として挙げることができる。①にも関連するが、アンダルシア州の企業が研究開発プロジェクトに関して州政府から財政的な支援を受ける場合は、大学を参加させることが義務付けられており、産学連携を後押しする仕組みとなっている。

③については、大学サイドで人により温度差があることも事実で



アントニオ・ロペス氏と

ある。今後は、人材や知識の、大学から企業への「移転」に関して、専門的に活動する組織の必要性を感じている。それ自身を生業とする独立した「会社組織」の存在が重要である。

3．スペインの太陽エネルギーの活用状況

近年、スペインは太陽エネルギー活用で注目を集めている。それを政策的に後押ししているのが、政府による固定価格での全量買取り制度「フィードインタリフ」である。今回の視察では、今後のスペインの動向について知見を得ることが目的の一つであった。

スペインは一次エネルギー総供給の約7％が再生可能エネルギーにより賄われており、そのうちの半分を木質チップ等のバイオマスが占めている（2007年）。近年、太陽エネルギーの伸びが著しく、特に「太陽熱発電」は導入規模で、ドイツに次いで欧州2位である。スペインの一次エネルギー総供給量内訳は石油47％、天然ガス22％、石炭14％等となっており、原油はほぼ100％を輸入に依存しているという状況である。このようなことから、エネルギー自給率向上が政府の大きな課題となっている。

自身でも実感したが、スペインは欧州において日射量が最も多く、用地も豊富なことも相俟って、太陽エネルギー利用に関しては最も恵まれた自然環境にあるといえる。

グラナダ大学本部での、アルメリア県太陽熱発電設備メディア担当であるFrancisco Martin氏によるプレゼンの概要は以下の通り。

・スペインにおいて近年、太陽熱利用は大変重要な役割・位置づけにある。

・我が県であるアルメリアの実証プラント（アンダソル）は最も重要なものの一つである。タベルナの砂漠地帯にあり、100ヘクタールの敷地で、これまで600万ユーロを投じてきた。これまで34年に渡り研究を進めてきており、従事者は140名程度、年間の運営コストの30％は自己収入で賄っている。アンダソル1は2009年3月に稼動開始しており、20万人分の電力を供給できる能力がある。

・太陽熱発電には主に3つの方式がある。①セントラルタワー方式は、中央に設置されたタワーにある集熱器に、平面鏡で集光して蒸気をつくり発電する方式である。②パラボリックトラフ方式は、曲面鏡を用いて鏡前に設置されたパイプに集光し、パイプ内を流れる液体（オイル）を加熱し、その熱で蒸気をつくり発電する方式である。③パラボリックトラフ・ディスク方式は、放物曲面状の鏡を用いて、鏡の前に設置されたスターリングエンジン等に集光し発電する方式である。

アンダソルの太陽熱集熱パネル

アンダソル全景

・①はヘリオスタットと呼ばれる太陽の動きに合わせて鏡の向きを調整する機構が必要であり、その技術的な課題及び高い建設コストといった問題がある。②は技術的リスクが低く、建設コストもそれ程高くないため、本県にあるアンダソル等スペインで一番設置が進んでいる。③は高温を得ることができ小出力で発電が可能だが、コストが非常に高く、現在のところ開発は進んでいない。

・今後の課題としては、「熱の受け皿」の研究があげられる。高効率・高い経済性を実現するため、流体だけでなく気体（水蒸気）を用いることを検討している。オイルはコストや加熱限度の問題があり、水蒸気であれば熱交換器が不要となる。

・プラントのメンテナンスや稼動時のコストダウン等課題も多いが、スペインとしては、国内の産官学連携を進め、太陽熱発電のトップランナーの地位を維持していきたい。

その後の質疑では、以下の2点について質問し、回答いただいた。

①太陽エネルギーのうち、今後は太陽光、太陽熱どちらに注力していくのか

②固定価格による全量買取り制度である「フィードインタリフ」の成果は何か

①については現在、太陽光は「太陽電池バブル」が弾けた状況であり、太陽光に比べて効率が倍以上、コストは半分と言われる太陽熱に今後は注力していくことになる。スペインは発電用の燃料の7割近くを海外から輸入しており、エネルギー自給率の向上を図る必要に迫られており、国家戦略として進めていく。

②については、25年間での固定価格での買取りという安定的条件により、相当数の企業が再生可能エネルギー分野に参入し、技術の蓄積が図られてきているという点である。

4．モロッコとスペイン・ドイツとの関係

今回の視察で最初に訪問したモロッコ王国は、イスラム教が国教の立憲君主制国家であるが、1912年にフランスの保護領および一部スペイン領となったこともあり、キリスト教やユダヤ教も禁止されておらず、「ソフト・イスラム」という表現がピッタリである。

モロッコは1859年に所謂「スペイン・モロッコ戦争」によりスペインに侵略された。1950年代後半には、スペインは一部を除いて領有権を放棄したが、現在でもフランス・スペインとの関

係が深い。

エネルギーに関しては、その殆どを輸入しており、一方で電力需要は年5％以上の増加を示している。このような状況下で政府は、再生可能エネルギーの開発に乗り出した。この背景には、モロッコが太陽エネルギーや風力の利用に恵まれた立地条件を有しているということがある。日照時間は年間3、000時間もあり、北部では風速が平均8m／sもあるという。広大なサハラ砂漠も背後に控えている。余談であるが、カサブランカやマラケシュの新興住宅の屋根に「太陽熱温水器」が設置されているのが目に付いた。

10月25日の日本大使館でのレクチャーでは、「太陽熱発電プロジェクト」について、今後大きな伸びが期待できるという。本年1月、モロッコ政府は、2020年までに太陽熱発電所を5ヶ所に建設し、総発電量を2、000MWとするプロジェクトを正式に発表した。全ての発電所が完成すると、モロッコの電力需要の2割を賄う計画である。ここにスペイン企業（セビリアのタワー式PS10を手掛けたアベンゴア・グループ）が食い込んでいる。

冨永参事官（中央）のレクチャー

一方、サハラ砂漠で太陽熱発電・太陽光発電を行い、直流高圧送電網で欧州に電力を供給しようという壮大な「デザーテック・プロジェクト」の動きが始まっている。この中心となっているのはシーメンスやRWE等のドイツ企業である。サハラを欧州の一大再生可能エネルギー発電拠点としようというものであり、2015年供給開始との報道もある。

日本政府も遅ればせながら、本年1月にモロッコ政府との間で、無償資金協力「太陽光を活用したクリーンエネルギー導入計画」に関する書簡の交換を行った。これにより電化が遅れている南部の電力不足解消、および石油消費量の削減によるCO_2排出削減を実現しようとするものである。

5. おわりに

冒頭触れたように、スペインが「太陽エネルギー天国」であることを実感した視察でもあった。そのような状況であっても、エネルギー総供給全体に占める割合は2％程度というのも、また事実である。太陽熱発電についても、アンダソルでは、日中得られた熱を「溶融塩」に蓄熱し、夜間や曇天時にはこの熱で発電する方式を採用しているが、高コスト等の問題もあり、モロッコに導入されるタイプは、天然ガス発電とのハイブリッド式である。

東京ガスも太陽熱や太陽光といった再生可能エネルギーとのコラボレーションの取り組みを開始しているが、これだけ恵まれたスペインでも限界があるように、出力の不安定さを補う仕組みが必要である。現実解はといえば、家庭用燃料電池エネファームや高効率ガス給湯器、吸収式ガス冷温水機と再生可能エネルギーとの組み合わせである。

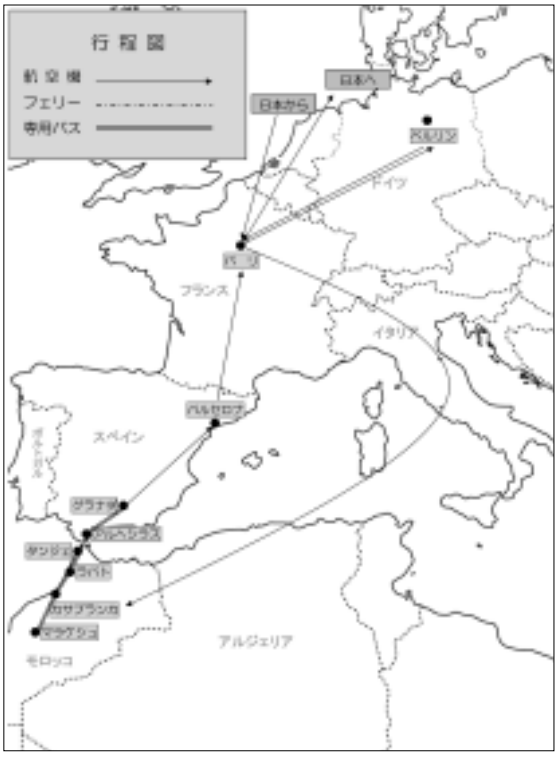
昨年の北欧視察でも感じたことであるが、欧州各国の「戦略性」の高さに脱帽する。EUとしての高い目標もあるが、ドイツやスペインの企業が、モロッコの太陽エネルギープロジェクトに参画すると同時に、「デザーテック・プロジェクト」のように、北アフリカを欧州の一大再生可能エネルギー拠点にしようという壮大な計画も着々と仕掛けている。

また、ドイツは太陽エネルギーや風力利用に関して、必ずしも有利な自然環境にないものの、国家戦略として導入を後押ししていることも興味深い。アンダソルには、ドイツのソーラーミレニアム社がスペインのACSコブラグループと共に参画している。

バルセロナ市でのレクチャー

スペインの「フィードインタリフ」について、グラナダ大学及び10月29日のバルセロナ地域開発エージェンシーにおいても、その成否について質問した。

いずれも企業の新規参入や技術の集積で成果があったと答えたが、25年にも渡る長期間での高価格での買取りと、電力料金への転嫁が十分でないこと等により、政府は昨年秋に太陽光発電について発電量の上限を定め、買取り価格上乗せを3割削減した。所謂PIGSと言われているように国家の巨額の財政赤字により、制度として行き詰った感がある。単に海外の事例を真似るのではなく、現地調査等でメリット・デメリットをしっかりと見極めながら、我が国としての制度設計を行う必要があると感じた次第である。



日産スペイン・インダストリアル・オペレーション（ＮＳＩＯ）の概要

吉野電化工業
社長　吉野　寛治氏

スペイン、バルセロナにある日産モトール・イベリカ会社（ＮＭＩＳＡ）を訪問し、黒沢社長より会社および欧州での日産の概要をご説明頂き、工場見学をさせて頂いた。

ＮＭＩＳＡの概要

ヨーロッパにおける日産の体制は、まず全体を統括する日産インターナショナルの本社がスイスのロールにあり、ここには高級ブランドのインフィニティ事業部もある。販売の欧州日産は本社をパリに置き、セールス、マーケティング、ファイナンス、物流、購買、品証がある。オランダのアムステルダムには物流基地があり、イギリスには製造会社ＮＭＵＫのサンダーランド工場とクランフィールドに設計部隊のＮＴＣＥがある。

そしてスペインには３つのカンパニーがある。製造の日産モトール・イベリカ、販売の日産イベリカおよび日産フォークリフト・エスパーナャである。ここバルセロナ地域にあるソナフランカ工場は５１７、６８７㎡で２、３９６名という構成である。敷地内にはテクニカルセンターもあり設計・開発部隊は１９６名いる。バルセロナ工場から30分ほどの所にあるモンカダ工場は鋼板プレスを行っており２０１名いる。車やスペアパーツを保管するロジスティックセンターもあり１６７名いる。スペインでのセールスを担当するのは日産イベリカで１６７名。これらがバルセロナ地域にある。さらにマドリッド近郊１時間程度の所には大きいトラックを製造するアビラ工場があり２２０千㎡、６４９名である。スペイン北部のカンタブリア工場では機械加工、鋳造、組立を７０５名で行ない１３２千㎡である。フォークリフト生産のパンプローナ工場もあり８８、５００㎡、３１３名いる。２０１０年３月現在、スペインにおける総従業員数は４、７９４名である。

ここソナフランカ工場（バルセロナ工場と呼ぶ場合もある）での生産車種はパスファインダー、ナバラ（トラック）、ルノーの車になるが日産プリマスター／ルノー・トラフィック／オペル・ビバロ、ＮＶ２００（日本名バネット）である。これらの車は日本では販売していないが欧米で売っている。アビラ工場では大きいトラックのキャブスター、アトレオンを生産している。

生産実績に関しては、今年に比べると景気が悪かった２００９年度は約６５、０００台であり、３年前の３分の１である。２０１０年度は11万台の見込みで需要が回復してきた。

その他パワートレインと呼ぶエンジンやアクセルの部品も生産しており、ディーゼルエンジンが約３２、０００台、マニュアル・トランスミッションが約２３、０００台、カンタブリア工場でのエンジン・ミッション部品は80万個、車軸部品が２０８万個、などがある。

欧州自動車市場の全体需要は、ロシアを除く２００９年度実績で１、６２２万台（前年比マイナス17％）、２０１０年はもっと良くなっているが欧州地場メーカーと米系メーカーには厳しい市場となっている。日本車のシェアは13％で、日産は41・5万台（ロシアを含めると60万台以上）を販売し、シェアは2.6％（前年比＋0.2％）であった。これで利益を稼ぎ出している。

日産の全欧州における販売台数は５７２、４０４台であったが、主力はＮＭＵＫ製キャシュカイ（日本ではデュアリス）で３７９、５７４台と非常に売れていた。その他、日本のマーチに相当するマイクラもある。日産の欧州販売における当社の販売は５２、５０２台であり、主なものはプリマスター２４、５４７台、ナバラ１５、１３４台などである。スペイン市場における乗用車全需要は９６７、３１０台、日産の販売台数は３７、８１３台でありシェア3.9％である。四輪駆動車やピックアップでは大きなシェアを持っていて、ピックアップのシェアは23・7％である。

スペイン生産車両　一覧

NMISA 生産実績（2009年度）

1.Vehicle

車種	2009年度実績
パスファインダー ＊	5,809台
ナバラ ＊	18,871台
NV200 ＊	3,271台
プリマスター、トラフィック、ビバロ ＊	26,193台
Avila工場製トラック（キャブスター、アトレオン）	18,215台
合計	65,359台

2.Power Train

	2009年度実績
ディーゼルエンジン ＊	32,367台
マニュアルトランスミッション ＊	23,418台
カンタブリア工場製エンジン、ミッション部品	80万個
カンタブリア工場製車軸部品	208万個

＊ バルセロナ工場

スペイン市場における日産車の販売（2009年度）

	全需	日産	シェア
乗用車	967,310台	37,813台	3,9%
4x4	76,324台	1,784台	2,3%
P/U	4,872台	1,154台	23,7%
商用、産業用	109,202台	5,811台	5,3%
合計	1,157,708台	46,562台	4,0%

生産実績を年次別総数で見ると、1995年は118千台で、その後だんだん落ちてきたが、新車投入効果もあり2000年には137千台に増大した。

2007年には223千台だったが、リーマンショックで2009年は65千台と、2007年の3分の1以下になった。2010年はみんなで頑張り110千台まで回復の見込みである。これまではコスト体質に甘さがあったが、ここでコスト改善が進み10万台で利益を稼ぎ出せるようになった。

会社の沿革は、1920年南スペインのカディスにフォードの子会社として設立し、その後1923年にバルセロナに移転してきた。1980年に日産が株式を一部取得し、1987年に社名を日産モトール・イベリカとした。つまり元からの日産の会社ではなく、この点がキーポイントでもある。基本データでは、資本金が7・26億ユーロ、欧州日産93%、日産自動車販売7%の構成である。売上高（2009年）は14・25億ユーロ、社員数は4、794名（2010年3月末）であり、日産からの出向者数が26名だが、現地化を進めているので減らす方向にある。

環境対応として日産本体が進めている、環境に優しい「日産グリーンプログラム」に沿った活動をしている。たとえばバルセロナ工場ではCO_2削減の取り組みをしている。環境に優しいということで4、5年前に太陽電池を取り付け発電している。政府が発電電力を5～6倍の価格で買ってくれるので、少しだが稼ぎがある。その他にも太陽光を利用し、窓を上手に使って工場内照明を節電している。また、太陽光を使って塗装工場内のお湯を温めており、工場内車両の燃料にはバイオ燃料も使用している。

この工場はバルセロナという都会にあるが、テストコースも持っているし購買や設計などすべての機能があり、それらを含めた人数は3、316人である。弱点としては工場拡張のスペースがないので、この中で何とかやりくりしている。

この後、車体工場と組立工場を見学させていただいた。

車体工場・組立工場の見学

まず、車体工場から見学した。製造ラインは2ラインあり、1ラインは日産・ルノーの混合ラインである。常時平均2種類のホイルベースと2種類の車高の異なる車種が混じりながら流れてくる。車体の色もばらばらであり多品種少量生産が行なわれていた。日産スタンダードライン（NSL）と呼ばれるFMSで、日産がファナックと設計したものである。4車種8型式までの混流生産が可能であり、最大能力は時間当たり60台である。人員は約250名である。

次に組立工場を見学した。設備は自動化されており、そのレベルはほぼ日本並みといえる。特色としてボディー部分と下回りをそれぞれ別に組み上げ、最後に上下を一体化させるという組み方をしていた。ボディー部分の各種ガラス類やパワーウィンドウ、インパネ周りを組み立てたものと、下回りは後輪デフをはじめサスペンションやトランスシャフト、ミッション、エンジン部分と前輪ステアリングユニットまで完全にサイドラインで別に組み立て、それを一体化させる方式である。この方がエンジンをぶら下げてチェーンブロックで吊り下げたり、車体の下のピットラインで組込みを行うよりかなり効率的でもあるし、人間に優しい方法であるとのこと。工場全体として人間工学（エルゴノミクス）的に配慮され徹底した改良を行っている。結果として組み立てライン横の部品置き場とサブ組エリアがなくなりスペース的にもかなり節約できているようだった。ただし、こうした特徴を生み出すために多額の投資が必要だったこと、大きいパレットを多数用意しそれらを移動させなければならないことなどがデメリットとのこと。人員は約500名である。

日産モトール・イベリカ社にて

見学した全体の印象として、実際かなり見学ライン脇がすっきりしていて余裕が感じられた。能力的には1台1分から車種によっては75秒位で1台流せるということだったが、マーケット全体の冷え込みの関係からか、実際にはそんなにラインとしては稼動していなかった。また、我々がちょうど15分間のブレークタイムにぶつかってしまったことも若干影響していたとも思われる。色の選定は200色可能だが現実には80色程度とのことだった。工場内の4Sは徹底して行われていた。

見学の後、質疑応答が行われた。

Q：スペインの中での日産のシェアが3.9%はかなり高いと感じたがいかがですか。

A：確かに頑張っているが、利益がどれだけ上げられるかが重要である。販売の難しさとして、日本で受け入れられている車が必ずしもヨーロッパでは受け入れられないこともある。

質疑応答

Q：現地調達というのはスペインからを指すのか、あるいはＥＵ内を指すのか。

A：ヨーロッパからの調達を現地調達としている。

Q：現地調達率はどの程度か。

A：２００８年のナバラとパスファインダーの場合、もともとの現地調達率が80％で、その内訳はスペイン国内で63％、スペイン以外のヨーロッパから33％である。残り20％が日本もしくは中国などである。昨年立ち上げたバネットはＫＤ部品が多くて日本や中国などから7割だが、来年の春には現地化を7～8割に持っていくことを目標にしている。為替の影響を受けないよう考慮している。

Q：組立のＮＳＬでは、車体と下回りを別々に組立てた後に一体化することで、かなりスペースができていると感じたが、これまで見た他の工場ではラインサイドにいろいろものがあった。ここでは大変スッキリしていたが、どのような工夫をされているのか。

A：ラインでそれぞれの車に取り付ける部品をあらかじめ別の所で箱にまとめ、これをラインに運び込んでいる。この作業をKittingと呼んでいる。このことにより物流の人員削減ができ、間違いがなくなり作業者のコストダウンが図れる。ラインサイドにあった棚がなくなることで空間がすっきりするとともに、作業者が良く見えるようになったことで作業者に緊張感が生まれている。

Q：最近日本の自動車部品メーカーがバルセロナから撤退したと聞いている。スペインの苦悩と再生という観点でみると現状はいかがなものでしょうか。

A：スペインというところはどちらかというと仕事がやりにくいところで、今から進出してくるのは難しいと思う。最大の問題は労働者を保護する法律が多すぎることである。労働者は言われるまでやらないという傾向があるが、厳しい管理をしようとすると労働者に有利なように法律が守ってしまう。また労働組合が強く、病欠時の保護が手厚いなど作業者のモチベーションを保つのが難しい。こうした逆境の中で仕事をせざるを得ないことについて、イギリスやスイスの本部の人間は、社会の体質が違うので分ってくれない。スペインは将来のある国だと思うが非常に運営の難しい国でもある。

Q：レイバーコストは日本やタイなど他の国と比較するとどの程度か。

A：労働者のアウトプットのポテンシャルは日本の9割はあると思うが、実際の労働アウトプットは7割程度だと思う。このレベルを日本並みにしていくことを目標にしている。

　レイバーコストはタイの10倍ほどになり、かなり高い。

Q：インフィニティ事業は日本ではなくなっているが、ヨーロッパでは位置付けが残っているのか。

A：ヨーロッパは始めたばかりである。このブランドを推進しようとしていて、いろいろな部署が立ち上がっている。バルセロナにもディーラーが2つある。

Q：レイバーコストが安いモロッコへの進出はありうるのか。

A：レイバーコストだけ考えれば進出の流れはあると思うが、品質や生産効率も併せて考える必要がある。モロッコでは安くても効率が悪く人数がたくさん必要だし、低品質をカバーする費用もかかるだろう。我々は、コストは高くても高品質、高効率の生産を目指している。それができなければ撤退もありうる厳しい環境である。

Q：完成車の出荷はどうしているのか。

A：ここから近い港に日産ディストリビューション・センターがあり、完成車はそこに運び、そこから船で出荷することができる。工場での在庫はほとんどゼロを目指している。

　今回の訪問では、黒沢社長に内情の細かいところまでお話しいただき、また普段では見られない生産状況まで見せていただくことができた。さらに、スペインでの経営で大変骨を折られていることもご披露いただけ、とても実り多い視察となった。改めて日産モトール・イベリカの皆様に感謝いたします。

日程表

月　日	曜	都　市　名	交通機関	摘　　要
2010年 10月23日	土	東京（成田１）　発 パリ（CDG２）　着 パリ（CDG２）　発 カサブランカ　着	AF－275 AF－1696	エールフランス航空にて、パリへ 乗り継ぎ、カサブランカへ （カサブランカ泊）
10月24日	日	カサブランカ ↓（230km） マラケシュ ↓ カサブランカ	専用バス	専用バスにて、マラケシュへ ●観光事情視察 世界遺産、マラケシュ旧市街視察（スーク、ジャマ・エル・フナ広場等） （カサブランカ泊）
10月25日	月	カサブランカ ↓（100km） ラバト ↓（260km） タンジェ	専用バス	●住友電工・電装現地法人工場視察 その後ラバトへ ●日本国大使館・総領事館往訪 ―BOPビジネスの展望について その後タンジェへ　（タンジェ泊）
10月26日	火	タンジェ　発 アルヘシラス　着 ↓（270km） グラナダ	専用バス フェリー 専用バス	フェリーにて、ジブラルタル海峡を渡り、アルヘシラスへ 専用バスにて、マラガ経由グラナダへ （グラナダ泊）
10月27日	水	グラナダ	専用バス	●グラナダ大学訪問 ―学園都市における産学連携事例 午後、グラナダ観光事情視察（世界遺産アルバイシン地区、アルハンブラ宮殿等）　（グラナダ泊）
10月28日	木	グラナダ　発 バルセロナ　着	VY－2317 専用バス	空路、バルセロナへ ●日産モトール・イベリカ社訪問 （バルセロナ泊）
10月29日	金	バルセロナ	専用バス	●バルセロナ地域開発エージェンシー訪問 ―世界的に有名な都市再生事例 午後、外尾氏レクチャー（世界遺産サグラダファミリア）　（バルセロナ泊）
10月30日	土	バルセロナ　発 パリ（CDG２）　着 パリ（CDG２）　発 ベルリン（TXL）　着	AF－1149 AF－2034	空路、ベルリンへ（パリ乗り継ぎ） （ベルリン泊）
10月31日	日	ベルリン	専用バス	ベルリン市内、及びポツダム市内視察 （ベルリン泊）
11月１日	月	ベルリン	専用バス	●埼玉県・ブランデンブルク州公式行事（上田知事一行と合流）　（ベルリン泊）
11月２日	火	ベルリン（TXL）　発 パリ（CDG２）　着 パリ（CDG２）　発	AF－1535 AF－276	エールフランス航空にて、パリ経由、帰国の途へ （機内泊）
11月３日	水	東京（成田１）　着		

バルセロナの旧市街再生事業

岩堀建設工業
社長　岩堀　和久氏

前説

今からおよそ三〇年前、大学で建築学を学んでいた筆者にとって都市計画は憧れの分野であり、世界各国の主たるプロジェクトに接するたびに心躍ったものだ。そして三〇年経った今、都市計画手法も変わり「都市再生」という新しい分野に目線を向ける必要性が出てきたように思う。このたび、経営者協会のスペイン視察団に参加させていただき、改めて勉強する機会に恵まれた。

今回は「都市再生事業」をテーマに話を進めていこうと思う。

「これまでの都市計画」は、車の開発に伴うモータリゼーションと、都市計画法に基づくゾーニングに裏付けされたインフラの開発計画が行われてきた。例えば米国の現代的都市開発手法に基づいて進められたNYのエンパイヤステートビルやロックフェラービルなどの超高層ビル群、サンフランシスコの金門橋（一九三七年完成）など、一九三〇年代に建てられた象徴的な建造物をシンボルとして急激に開発を進める手法がとられた。日本においても戦後の復興、高度成長、一九六四年に開かれた東京オリンピックなど、米国の開発に習って思想や技術が伝播され次々に高速道路や超高層ビルが建設されていった。商業・工業・住居はそれぞれゾーニングされ、それをつなぐ鉄道や自動車が連絡する手段として発展していった。日本経済の発展と伴に建造物は作られ、都市はスプロール化していった。当時の都市計画は経済性のみを追求した側面を持っていたといえる。

スペインにおいても同じようなことが起きていたようだ。スペインの開発計画は、一八五九年のバルセロナ拡張計画に端を発していると言われている。この計画は欧州三大拡張計画とされ、大通りの整備がスタートしたとされる。しかし現実的には、無理な土地収用がたたり、地権者の反発を招き、成功に至ったとは言いにくい。十九世紀から二十世紀にかけてはスクラップ&ビルドが続き、俗に言う「クリアランス型」開発に終始してきた。一九五六年に土地法（都市計画法）が制定され、総合プランに基づく開発が行われるようになった。しかし一九九〇年の土地法改正になるまでは依然として問題点が多く、収用される地権者も、住み替え用の住宅を供給するといった、現在では当たり前のことも議論すらされてこなかったようだ。（今、中国国内の開発がこの状態かもしれない）

「バルセロナ市役所にて」

今回我々一行はバルセロナ市役所の国際開発課を訪れ、担当のメイさんから、バルセロナ再生事業について講義を受けた。次はその内容について、まとめてみる。

バルセロナの再生計画に関して代表的なプロジェクトが、「旧市街ラバル地区の再生事業」と新市街地「22@」である。今回は、「22@」について考察していく。

一八八〇年頃バルセロナは「カタルーニャのマンチェスター」と呼ばれていた程、工業が盛んな土地として知られていた。その中心地がバルセロナ都市部東側に位置する「ボブレノウ地区」である。しかし環境問題やスペース不足に悩まされて、少しずつこのエリアにおいて移転が始まり、空地が出来るようになっていった。一九九二年のオリンピックを契機に状況は一変。国内外から多大な投資を呼び込み、バルセロナ全体の戦略的な事業が始まった。

バルセロナの都市再生事業の礎は一九八〇年から始まったとされている。オリンピックの開催地決定は一九八六年のことであり、この前から準備されてきたとすればピタリと一致する。昨今のオリンピックは一時の豪華主義から変わって、テーマが「文化促進」や「環境」というコンセプトワークが求められるようになってきた。

同地区においては、オリンピックの選手が泊まる選手村として開発された。ハード面として様々な都市インフラ整備や競技、文化施設が作られ、ソフト面においてもオリンピック協議会から様々な文化プログラムを要求されたことで、これまでのインフラ重視から変貌した再生計画が進んでいった。また二〇〇四年五月に行われた世界文化フォーラムもポイントになった。会場となった「フォーラムビルディング」に隣接する形で海岸線が整備され、ヨットスクール場や子供達の遊技場、大規模なソーラー発電や浄化槽、ひいては火葬場まで作られ、住民の生活と重なったコンパクトシティが実現していった。メイさんからいただいた資料を基に「22@」開発の概要を記してみる。

ソーラー発電

子供達の遊場

ヨットスクール

延べ床面積（許容）約４００万㎡、再開発期間は、二〇〇〇年から始まり、二〇一〇年現在、プロジェクトは70％完成している。全て完成すると、人口10万人、就業者12万人の予定。オフィス床は３００万㎡、緑地・公営住宅は80万㎡、分譲住宅４、０００戸、保存建物１１４件、新規事業者数は１、４４１社にもなっている。

『バルセロナ再生モデルのキーワード』

①「公共空間の創出」

欧州、特にスペインにおいては元々、昔からあった街の広場や通りに人々が集うことが公共空間とされている。こうした空間を開発者（主に役所）が、意識的に、そして部分的に作ってあげることで地域に住む人々との交流が出来、再生計画に血流が流れていく。ここが日本の大型開発手法との違いではないかと思う。日本の場合、都市開発ではよく総合設計制度に基づいて作られた公共ゾーンがある。一つのエリア開発の中で建物の容積率緩和を取るために作られた空間は、人々のくつろぎやたまり場にはなりにくいと考える。人々の生活をしっかりと見つめて、そこから沸きあがってくる愛情ある空間を創出することが大切だと感じる。

②「市民参加型」

日本のプロジェクトにおいては、有識者会議が開かれて、政策の骨子が決められていくケースが多くある。実際のところは、その政策が先に前提としてあり、それに沿うように方向性が決められていくことも多々あるように感じる。

バルセロナにおいては、一つの例として、街角で行われる会議に七百人もの市民が参加して、生活者としての意見を交わし、役人はもちろん、地権者やデベロッパーを巻き込んで議論し、空間を創り出していく。残すべき建物と認められれば、取り壊すことなく、修復して建物の価値を上げていく。

今現在１１４件の保存建物があるのは、こうした理由による。もちろん、市役所のメイさんによれば、再生計画のポイントは「強い意志を持つリーダーの存在」が欠かせないと指摘されているが、逆に市民を巻き込んだ中でのリーダーは、より強力になることであろう。

③「公的機関の役割」

こうした意味からバルセロナの公的機関である日本でいうところの「都市再生機構」の存在は、長い年月をかけて行っていく上で重要であるといえる。

スペインのような歴史的な背景があるエリアの開発、再生事業は、権利関係、宗教問題、居住者層の偏り、財政不足といった問題をいつも抱えている。そうした中で都市再生機構の役割は、より高度になっていく。「官民連携」の仕組みを作り上げていくことが大切である。

一例を挙げてみる。容積率の緩和である。もともと容積率が２００％だったエリアを「22@」では一律２２０％に上げた。日本のように４００％とか６００％としないで、高層化を防ぎながら上げていく。ＩＴ関連産業や文化施設が入る場合には、２７０％まで引き上げ、知的集積を強化していく戦略である。役所は地権者やデベロッパーにメリットを与える反面、道路整備などの義務付けを行う。役所はこうした試みの結果、公共資金負担割合を、総事業費の10％に抑えて、民間主体型開発へ導いていく。又こうした民間に対し、再生機構側は、再開発資金の流れを作り上げていくことがポイントとなる。日本では近年民間レベルにおいて、単発プロジェクトによるファンド組成の失敗例が報告されているが、都市再生資金は、より広域なビジョンに基づいて裏打ちされた組織編成が大切とされている。「22@」においては、ＵＬＩという欧州において都市再生資金の取りまとめを行うコーディネーターがおり、都市再生機構と民間デベロッパーとの間の資金面での中心的役割を担っている。

④「モータリゼーションからの脱却」

モータリゼーションが人々を郊外に追いやり、用途別にゾーニングされていくことによって、中心市街地が閑散となっていく現象は、日本においても社会問題となっている。この地区では、路面電車「トラム」がメインストリートを四分間隔で走り回っている。その両サイドにはきれいな芝生が敷き詰められている。また車をできるだけ中心地から追いやる方法として、「レンタル自転車」がある。バルセロナ市民のための自転車の共有制度「スマートバイク」はつい最近導入されたようだが、非常に好評のようだ。市内に住む市民なら皆自由に使えるようにシステム化され、今現在、６千台まで増えているそうである。車から自転車に変えていこうとするこの試みは「CO_2の排出削減」にも役だっていると、役所の人達が胸を張って自慢していた。

路面電車「トラム」

レンタル自転車

「問題点」

このような素晴らしい再生計画にも悩みはあるようだ。それは街が素晴らしくなっていくと同時に、元々住んでいた住民が結果として、ほかの地域に移り住んでいくことである。開発が進むにつれ、既住民のための代替住宅への移行が遅れたり、またインフラが整備され、ＩＴ関連のいわゆるインテリ層が増えることで、地域全体の物価が上がり、住みづらくなっていく人も多く発生しているとのことだ。

「最後に」

イギリスのリチャード・ロジャースによれば、都市再生には６つのポイントがあると述べている。今回考察してきたバルセロナモデルに当てはまる点もあり、また今後日本再生計画を論じていく上で参考になればと思い、最後に記述して筆をおきたいと思う。

一、高密で、コンパクトで、伝統があり、山や川、海が結びついた地域の特性を生かすこと。
二、公共空間の開発を、あらゆる所得層の市民を巻き込む手段として活用すること。
三、大きな戦略のもとで、都市の各地域で、局所的なプロジェクトを生じさせること。
四、参加の実感と、都市に対する誇りを人々に与えること。
五、責任者の任期と政党を超えて継続する、強力なコンセンサスを形成すること。
六、優れた才能を持つデザイナーを採用すること。

現地講演報告
「今も生き続けるガウディのメッセージ　外尾悦郎氏」

中原建設
社長　中原　誠氏

「はじめに」

海外視察も後半へとさしかかる10月29日の午後、私たちはバルセロナでもっとも有名な観光スポットであるサグラダファミリアを訪問しました。目的は現地で永きにわたりご活躍をされる日本人彫刻家、外尾悦郎氏にお会いをさせていただき、ご講演いただくことでした。

サグラダファミリア（以下、聖堂と記述します）は1882年より建築がはじまり、現在もその建築が続けられていることで有名な聖堂です。日本語では「聖家族贖罪聖堂」という意味をもち、イエスと聖母マリアそれに養父ヨセフを加えた所謂「聖家族」に捧げられた、罪を贖う貧しき者たちのための聖堂としてその建築が始められました。

有名な建築家アントニオ・ガウディが1926年、享年74歳で亡くなるまで、その人生のすべてを注ぎ込んだ聖堂として知られています。ガウディ亡き後の1936年スペイン市民戦争では、聖堂の一部やガウディが残した模型などがすべて破壊されるという事態にも陥り、困難な歴史の中を建築が続けられてきました。

外尾氏は1953年福岡県にお生まれになり、1977年に京都市立芸術大学彫刻科をご卒業されます。一旦は日本で美術の非常勤講師をされておりましたが、一年後の1978年に「ただ石が彫りたい」という一心で単身日本を飛び出してヨーロッパへと渡られます。ヨーロッパでは引きつけられるようにバルセロナへと辿りつき、聖堂で無造作に積まれた石材の山に心を奪われます。そこでとにかく石が彫りたいと熱望された外尾氏は、当時の主任建築家（ガウディの直弟子）の方々となんとか会うまでにこぎつけ、試験をおこなうこととなり、そしてそれに見事合格をして彫刻家として働くことになりました。

サグラダファミリア

以来現在にいたるまで32年間、聖堂で数々の重要な彫刻を手掛けられます。現在も専任彫刻家として聖堂の建築に携わる一方で、九州大学、京都嵯峨芸術大学、カタルーニャ国際大学で客員教授を務められております。

当日は聖堂に併設をする資料館をお借りして、外尾氏に直接ガウディの世界についてご講演をいただき、その後に聖堂を見学するというコースでありました。

「聖堂付属小学校に込められたガウディの想い」

講演いただく資料館は、もともと聖堂の建築現場で働く職人の子供たちのために、ガウディが私財を投じて建設した聖堂付属の小学校でありました。

外尾氏曰く、「希望とはつまり人間が生き物として強く生きようと願う気持ちだと思います。そしてその気持ちは何より自分以外の誰かに対する無償の愛情の中に湧き上がるものだと思います。自分の子供たちの学びの場所を教会の横に提供し、そこで愛する子供たちの成長に喜び、そして生きる希望を感じる。職人たちが毎日希望をもって仕事に臨んでほしい。そのような想いがガウディにはありました」。

1882年より現在までの128年間、ここでは死亡事故が起きておりません。毎日に希望をもって働くということが、この奇跡を生み出しているのではと外尾氏は語られておりました。

この資料館は図1のように屋根も壁もすべて錐状面と呼ばれる言わば水面のうねりのような曲面の連続でつくられております。ここにはガウディというものが常に構造と機能と象徴という、それぞれ別々の側面を総合的にかつ同時に考えていたということが理解されます。

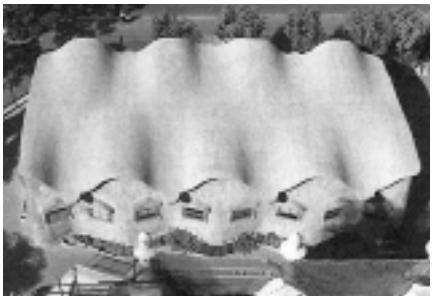


図1　聖堂付属小学校（現在は資料館）を上から見たところ

当時、経済的にまったく余裕のなかったガウディは、できるだけコストをかけないようにと薄い煉瓦をつかって頑丈な建物をつくることを考えました。

紙をたたせるときにアコーディオンのように紙を折り曲げれば、しっかりとたたせることができます。波打った屋根は雨が降っても自然に雨水を流し落とし、雨漏りの心配がありません。つまりこの建物は機能と構造を同時に満たすことを考えてつくられたのです。

そしてさらにこの建物を上からみるとそこには三つのハートが重なり合った形をつくっています。これは聖堂と同じくイエスとマリアとヨセフの三つのハートの重なりを表現したもので、その家族愛が屋根となって子供たちを守るということを象徴しています。

一見奇異に見えるガウディのデザインは、実はそれらがすべてこの機能と構造と象徴の総合の結果として考えられたものであるということになります。

「自然から学んだ知恵～直線でつくられる曲面」

ガウディの建築物の特徴はまさに全体を構成する曲面にあります。しかしその曲面は実はすべて直

線によってつくられています。聖堂建設のいたるところにとりいれられている代表的な「直線でつくる曲面」として、ここでは双曲線面（図2）と放物線面（図3）について解説がありました。

双曲線面の模型が図2です。円柱をねじった鼓のような形です。一見複雑に見えますが円柱の側面には曲面ができ、それはすべて上の円と下の円を結ぶ直線でできています。上と下にできている円は断面に生じている円であり、円を結ぶ直線が無限に続いているとしたら存在しない円となります。

この双曲線面は聖堂の大窓や天井窓といった主に採光部分に取り入られることによって、多くの光を取り込む機能を生み出しています。

放物線面の模型が図3です。模型は二つの三角形が一辺を共有させて開いたような形をつくっています。二つの三角形の残りの辺のうち、接していない辺と辺をそれぞれ同じ点で結んだものです。結ばれた線は全て直線ですがそこには曲面が生まれ、これを放物線面といいます。

普通は直角に交わる梁と柱が接合するような部分に、この放物線面でできた曲面をガウディは採用しています。それによって接合部分にかかる荷重の流れを非常にスムースなものにしています。

そもそもガウディがなぜこのような構造を多く取り入れたのかということですが、そこには彼を知る上での大きな特性があります。ガウディがこのような構造を取り入れるのは、「すべては自然の中の有機的なものとして存在する」という考えがベースとなっているところにあります。

したがって彼のつくる建築物には自然の力をいかに取り込むかということや、自然の生物がつくり出す自然の形を、いかにして取り入れるかということが追求されています。

つまり双曲線面は太陽の光の特性に着目した結果であり、放物線面は草木の枝の付き方から学びとられたものといえます。

そしてそれを直線で解析するということは、曲面という不安定なものに一定の統一性を持たせるという意味があります。

ガウディはこれらの構造を人並み外れた観察力をもって自然界から学び取り、そして活用しています。

彼は人間として謙虚な気持ちで原点に回帰をし、神がつくったこの偉大な自然界にどんな建築物を残すのが望ましいか、そのことを純粋に追求していたのではと思われます。

人間は絶えず合理的なもの、便利なものを追求しつづけ発展してきました。しかし同時に環境問題やエネルギー問題などを生み出して時に戦争という悲しい歴史もつくってきました。

経済においてもただ私欲を追求することに没頭をした挙句に、恐慌を招くというようなことを繰り返しています。どちらも自然界における行き過ぎた人間のエゴが生み出した歪のように感じます。

人間は自然界の一員であって、自然の法則に逆らわずに、そこに謙虚に向き合い生きるべきである。ガウディが聖堂に向き合った姿勢からは現在にも通じるそのようなメッセージを学びとることができるのではないかと思います。

「天に引きつけられる聖堂」

ガウディは聖堂建築にあたり「逆さ釣り実験」ということを行いました。

図4のように天井に糸を固定し、錘をつかっていくつかの交点をつくりそれを結んで、丁度建物がさかさまに吊るされているように形づくります。この時に糸にできる曲線を最も重要な懸垂曲線として抽出し、建築物に活用していきます。逆さ釣りの状態で自然のつくられた懸垂曲線はその形によって重力の均衡状態をつくっています。建物を建てていく時に出来るアーチの形状にこの懸垂曲線を逆にして採用していくことにより、重力の均衡が上からの圧縮力の均衡となり、自らの重みを自らで支える最も無駄のない安定した建物にすることができます。

こうしてガウディは重力という自然の力に対して理想的な構造を見出し、それを聖堂建設も活用することによって、積み上げた石がそれだけでも崩れない構造の建物をつくろうとしたのでした。建築とは物を上へと積み上げていく行為であり、重力に逆らう行為ですが、ここではその相反する力を味方にしたというわけです。

「相反するもの、つまり自分の敵と争うことばかりに目がいきがちになるのも人間でありますが、敵を味方に変える発想をもてるすばらしい能力があるのもやはり人間だと思います」。外尾氏はそう語られておりました。

下から聖堂を見上げた時に感じる圧倒的な迫力と奇妙な安定感、そして同時に感じる上昇感。まさに「重力によって天にひきつけられる聖堂」という印象を多くの人が感じたのではないかと思います。

「職人たちとの心のコミュニケーション」

ガウディは建築をすすめる上で図面というものを使わず、模型を使って職人たちとのコミュニケーションをとってきたそうです。

これは模型を職人たちの手で直接触れさせることにより、職人たちの自ら生まれる発想や感性、さらには実現可能かどうかのイメージを強く引き出そうと考えたからです。

外尾氏は次のように語られました。

「この図面通りにとにかくつくれ、というスタイルはそこに携わる人間に義務感がわきます。義務感のある仕事では人間はなんとかそこで手を抜こうとしないでしょうか」。

ガウディは模型を手に「君ならどうする」というような問いかけ

図2　双曲線面

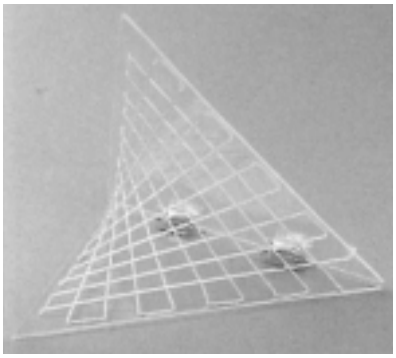


図3　放物線面

図4　コローニア・グエル教会の逆さ吊り実験の模様　写真提供：バルセロナ司教区美術館

を常にすることで職人たちの情熱を引き出し、その気持ちを共有する中で聖堂の建設を進めようと考えたのです。

この聖堂が128年間にわたり死亡事故がないということを前述しましたが、ガウディが人間の強さや弱さを深く理解し、職人たちをたえず意欲的に仕事に向かわせることに配慮したこと、そのことも奇跡を生む一因であったと思われます。

「終わりに」

そもそも石を彫りたいという気持ちだけがスタートであった外尾氏でしたが、その真剣な語り口からは、そこに携わるということが単にものをつくるということだけにとどまらず、必然的にガウディの精神と常に対話をすることを求められたのだと感じました。

スペイン、カタルーニャで生まれたガウディの心が日本人である外尾悦郎氏の感性によって紐解かれ、それがまた多くの職人たちに受け継がれていく様は日本人として何とも誇らしく感じます。

そして何よりガウディがこの聖堂建築を通して残したメッセージが、現代の会社経営においても、私の人生においても、全く色あせないメッセージとして響くことに感動を憶えます。

「サグラダファミリアは人間をつくる道具なのです」。最後に外尾氏はそう語られました。

「この聖堂の完成はいつなのでしょうか」との参加者からの質問に外尾氏はお答えになります。

「人間として完成とはどういうことでしょうか。それは死を迎えることだと思います。したがって、あなたが生き続ける限り、あなたにとってサグラダファミリアはずっと未完成であり続けるということなのではないですか」。

私たちが帰国をした直後の11月7日には、ローマ法王ベネディクト16世が聖堂を訪れて初めてのミサが行われました。

そのような大変ご多忙の中をご講演くださいました外尾悦郎様にこの場をおかりして改めまして深く感謝申し上げます。

そして、本当にすばらしい海外視察をご提供いただいた埼玉県経営者協会様、ご同行させていただいたすばらしい皆様方に深く感謝を申し上げて、現地講演の報告とさせていただきます。

外尾氏（左から3人目）の講義風景

他掲以外の参加者たち

参加者名簿

（敬称略順不同）

氏　名	所属名・役職
利根（とね）　忠博（ただひろ）	株式会社埼玉りそな銀行　シニアアドバイザー
細沼（ほそぬま）　哲夫（てつお）	日本伸管株式会社　代表取締役会長
藤池（ふじいけ）　誠治（せいじ）	株式会社デサン　代表取締役
飯塚（いいづか）　博文（ひろぶみ）	サイボー株式会社　代表取締役会長
池田（いけだ）　繁（しげる）	キヤノン電子株式会社　専務取締役
吉野（よしの）　寛治（かんじ）	吉野電化工業株式会社　代表取締役
荻野（おぎの）　芳朗（よしろう）	株式会社ピックルスコーポレーション　代表取締役
原（はら）　敏成（としなり）	武州ガス株式会社　取締役社長
岩堀（いわほり）　和久（かずひさ）	岩堀建設工業株式会社　代表取締役
中原（なかはら）　誠（まこと）	中原建設株式会社　代表取締役社長
高嶋（たかしま）　英一（えいいち）	東京ガス株式会社 埼玉支店　支店長
飯野（いいの）　浩一（こういち）	税理士法人優和　公認会計士
平山（ひらやま）　隆志（たかし）	AGS 株式会社　常務執行役員
三友（みとも）　哲哉（てつや）	八千代紡績株式会社　部長
三國（みくに）　雅裕（まさひろ）	社団法人埼玉県経営者協会　専務理事
早崎（はやさき）　寛（ひろし）	ティ・シィ・アイ ジャパン株式会社　代表取締役

藤池　誠治氏

細沼　哲夫氏

荻野　芳朗氏

飯塚　博文氏

平山　隆志氏

県・ブランデンブルク州姉妹提携10周年記念事業に参加して

武州ガス
社長　原　敏成氏

【概要】

日独交流150周年、東西ドイツ統一20周年に当たる本年、埼玉県とドイツ連邦共和国ブランデンブルク州の姉妹県州相互交流強化を目的とし、上田清司埼玉県知事がブランデンブルク州を訪問されたのに際し、埼玉県経営者協会社会経済視察団も一部行事に参加させていただいた。具体的には、州立映画・テレビ大学学長との会談および学内視察、スタジオバーベルスベルク株式会社（撮影所）視察、州経済・欧州担当大臣との会談、埼玉県・ブランデンブルク州経済セミナー、埼玉県・ブランデンブルク州交流会である。これらの行事には、埼玉県議会ブランデンブルク州友好親善訪問団、埼玉県女性リーダー海外研修団も参加した。

１９９９年の、姉妹提携から数えても10年以上の交流の歴史があり、友好的な雰囲気の中で交流が進み、訪問の目的は果たされたと思われる。当視察団としても、ブランデンブルク州の社会、経済、環境問題等の事情を実体験として知ることができ、特に交流会では、具体的な商談までする、地元企業の熱心な対応に感銘を受けるとともに、話し合いの中で、埼玉県の事情や、日本の技術の話も出るなど、少しはブランデンブルク州の皆さんにも有効な機会となったのではないかと感じている。

【日本とドイツの比較】

日本とドイツの主な点の比較をしてみると、第二次世界大戦後、ドイツは東西に分断され、20年前に統一を果たしたことや、今やＥＵに属し、連邦制であり州の独立性が高いことなど違いはあるが、戦後、急速に復興し、国の規模、高い技術力を持つなど、共通点が多い。

日本とドイツの比較

日本国	国　名	ドイツ連邦共和国
37.8万平方km	面　積	35.7万平方km
474兆2,969億円（2009年度）	国内総生産	248兆4000億円※（2009年度）
1億2739万人	人　口	8,200万人
371万8,500円	一人当たりの名目 GDP	338万3,760円※
47都道府県	県・州の数	16州

※１ユーロ＝115円で換算

【埼玉県とブランデンブルク州の比較】

埼玉県とブランデンブルク州は埼玉の工業が、自動車、機械、金属加工が中心であるのに対し、州は鉄鋼、化学、エネルギーなどが中心である点や、人口数、ＧＤＰなど規模では違いがあるものの、首都ベルリン（人口約３４３万人）を取り囲んで位置する点などは埼玉との共通点もある。

埼玉県とブランデンブルク州の比較

埼玉県	県(州)名	ブランデンブルク州
3,797平方km	面積	29,480平方km
21兆1,081億円（2007年度）	県(州)内総生産	8兆7,758億円（2007年度）
711万533人	人口	253万64人
297万円	一人当たりのGDP	約330万円

【映画・テレビ大学学長との会談および学内視察】

この大学のあるバーベルスベルクはヒットラーの時代に、映画製作の地区として開発された。ベルリンから近く、広大な敷地が確保できるということから選ばれたという。当時の映画は、娯楽映画が多かったという話である。

会談は大学から概要の説明があった後、ディーター・ヴィーデマン学長の挨拶から始まった。

大学は、男女ほぼ同数で、計５００人の学生と、１５０人の教職、事務職員から成り立っている。授業料は無料である。スタジオバーベルスベルクとの協力は勿論であるが、ブランデンブルクの放送局とも協力関係にあり、多くの有能な人材を送り出しており、芸術的成果を認められているとの話であった。

上田知事からは、知事団のほか、渋谷県議会副議長を始めとした、県議会議員の14名、柿沼団長を始めとした、埼玉県女性リーダー海外研修団の16名、利根会長を始めとした、埼玉県経営者協会社会経済視察団の18名が今回の会談に臨んでいることが紹介され、埼玉県においても、ＳＫＩＰシティを始めとした、埼玉県の映像産業拠点の活用、「国際デジタルシネマ映画祭」について説明し、映画祭参加も含めた、両県州で映像分野での、若い人に夢を与えることのできる、新たな交流を呼びかけた。

渋谷埼玉県議会副議長から、技術発展により映像の多様化が進む中で、研究・教育を進め、コンテンツ産業の発展に貢献されることを期待するという挨拶があった。

ゲストブック署名、記念品贈呈、記念写真撮影の後、大学内で製作された、映像コンテンツを視聴した。

大学内には、編集スタジオ、撮影スタジオ等があり、映像コンテンツ制作に関係する全ての教育ができるようである。３人の日本人も留学しており、そのうちの映画美術を専攻されている方にお会いして、頼もしい思いがした。

ゲストブックに署名する上田知事

【スタジオバーベルスベルク株式会社（撮影所）視察】

会社は、映像・テレビ大学から歩いていける距離にあり、卒業生を受け入れるなど、大学と協力関係にある。ヨーロッパの街並のセットと、映画に使う衣装や道具を保管、製作する施設を見学した。第二次世界大戦前からの歴史を持ち、セットでは「戦場のピアニスト」の撮影もされるなど、現在も有数の撮影所である。ハリウッドの映画会社がよく使うという話であった。衣装等の施設については、時代順に保管された様々な衣装を見学することができ、それぞれの時代に迷い込んだように感じた。

【州経済・欧州担当大臣との会談】

会談は州首相府内で行われた。最初にラルフ・クリストファース州経済・欧州担当大臣から、「埼玉から大勢の視察団が訪れ、こうした会合ができることは、両州県の関係が如何に重要なものであるかの証拠である。２０１２年に新しいベルリン空港の開設が迫り、アジアとの距離もさらに縮まり、関心も高まっている。埼玉県とも将来にわたり、持続可能エネルギーなど共通の問題でもあり、交流を進めて行きたい」との挨拶があった。

上田知事からは、「日独交流１５０周年の記念すべき年に、両県州交流10年を超えた機会に訪問できたことは、大変喜ばしいことである。埼玉は、自動車、機械など高い技術力を持った産業があり、高速道路網、鉄道網など日本でも有数な事業環境が整った県であり、州との交流を一層進めて行きたい」との挨拶があった。

利根会長からは、ワールドカップでの第3位のお祝いを述べられた後、「日本はベスト16の結果であった。浦和レッズの監督は3代、ドイツ人であり、日本人には、早い攻撃、強い守り、創造性のある、ドイツ流があっているのではないか。戦後の復興についても、ドイツを手本にしてきた。リーマンショック後の対応についても、門戸を外に開いているドイツの対応のが参考になる」という挨拶があった。

挨拶する利根会長

【埼玉県・ブランデンブルク州経済セミナー】

大臣から、「ブランデンブルク州経済は今年になり、医薬品や航空分野で昨年を上回る成績を残している。その中で、オリンパスは３００人以上の雇用を確保してくれており、ありがたく思っている。炭素固定化技術など、環境産業においては、優秀な技術力があり、１２、０００人の雇用創出が見込まれている。埼玉県とも協力していけるのではないか」との説明があった。

岡田次席公使からは、「両県州は１９９９年に姉妹県州となり11年を経過した。両地域の発展を希望する。ドイツは、再統一20周年を迎え、東西の格差是正に取り組んでいる。環境エネルギー政策では脱原子力、再生可能エネルギー利用を進めている。ブランデンブルクとベルリン、埼玉と東京の関係は似た位置関係にあり、日本とドイツも有数な国として、共通の課題が多い。解決には、言うまでも無く努力が必要である。次世代産業の発展、イノベーションが必要であり、協力することで解決できる問題もあるのではないか。通商修好条約が結ばれた１８６１年から１５０周年の機会に開かれたこのセミナーが有効なものになることを期待する」との話があった。

知事からは、「ブランデンブルクはヨーロッパの中心であり、バイオテクノロジーや医療技術、ＩＣＴ技術やメディア技術などの集積もあり、発展が見込まれている。山一電機ドイツ㈲などの工場もあり、日本との関係も深い。埼玉も、東北自動車道などと接続する、建設が進む圏央道、新青森駅開業、北陸新幹線開業などが予定される、新幹線の利便性などがあり、自動車産業や研究施設もある可能性の高い県である。両県州の協力により課題解決につなげたい」との話があった。

カマラート経済振興公社総裁からは、「風力やバイオマスの利用など、再生可能エネルギー利用を促進している。空港開設は大きな意味があると考えている。自然や、過去の建物を保存しながら、発展を図って行きたい」との話があった。

山一電機ドイツ㈲の近岡取締役からは、「山一電機はコネクターなど電気部品を製造、販売する会社である。世界各国に約１９０億円の売上げがある。ブランデンブルクでは、ＩＣソケット、太陽光発電コネクターを製造している。ブランデンブルク州の政府支援、人材の確保などの点からこの地で操業している。２５０名の従業員がおり、土地はレンタルである。物流や、通信の面でも優位性がある。計画以上の成績を上げている」との話があった。

【埼玉県・ブランデンブルク州交流会】

今回の埼玉県訪問団全てが参加し、部門別のテーブルが設けられ、活発な意見交換が行われた。知事も参加者との交流を深めた。知事の「地方政府も主体的に企業のグローバル化を支援する必要がある」との考えの実践の場であった。

会場では、埼玉県の地ビールや地酒、お菓子などが提供され、埼玉の豊かな「食」を味わいながら、様々な問題について意見交換を行った。ブランデンブルクに進出の意思はあるかとか、電気自動車の充填所建設のノウハウがあるので建設はしないかなどの具体的な話もあるなど、ドイツ側参加者の積極性に感銘を受けた。

交流会風景

観光を通じたモロッコ事情

専務理事　三国　雅裕

10月24日、いよいよ今日から視察はスタートする。日曜日のこの日は世界遺産のマラケシュ旧市街へ。ガジュマルやヤシでセパレートされた並木が続くカサブランカ市内から高速道路に入り、一路マラケシュへと向かう。車窓からは、小麦の畑や牛・ヤギの放牧が所々で目に入るが、殆どは地平線が360度見渡せる広大な荒野が続く。南下するに従い、一面乾燥した砂と岩の大地が広がる。このままいくと西サハラかと思ったりもする光景だ。

これぞアフリカか?。

高速道路を行き交う車はとても少ない。バスは100㎞で走行するので、マラケシュまでの230㎞を予定通り、途中休憩をはさみ、約3時間で到着した。

マラケシュ

モロッコは有史以来、ヨーロッパ・アフリカ・アラブをつなぐ交易の十字路として重要な役割を果たしてきた。610年頃に誕生したイスラム教は、アラブ人による「ウマイヤ朝」としてイスラム王国を誕生させ、その勢力はアラビア半島を皮切りに、ペルシャ、エジプト、そして、ここ北アフリカをも征服する。

モロッコの町は、アラブ人が造った旧市街メディナと19世紀になって発達した新市街に分かれる。メディナは城壁に囲まれ、狭い路地が曲がりくねり、迷路のように張り巡らされ、商店や住宅が詰まっており、外敵から守る設計。

正にマラケシュは、多彩な文化が入り混じるモロッコの縮図とも言える。世界最大とも言われるスーク（商業地区）は、交易の中継地として発展した町。新市街は近代的なリゾート風の建物が立ち並ぶが、ここの目玉は何と言ってもメディナ。建物は赤土のレンガで造られ、ナツメヤシやオリーブの緑が囲む。スークは、自動車・バイクが行きかい、楽器や人々の声が響き渡る。生活感とともに活気に満ちあふれている。

中心はジャマ・エル・フナ広場で、ヘビ使いなどの大道芸人たちが観光客を引き付け、その周りには屋台やカフェ、その奥には土産物などの商店が広がり、ざわめく喧騒の中にモロッコのエネルギーを感じた。

その他、サアード朝（16世紀中頃から1世紀続いた）の代々のスルタン（スンニー派イスラム王朝の君主）が葬られている墳墓群、バヒア宮殿などのイスラム文化を視察した。

モロッコを始めアルジェリア、チュニジアを加えた3国は、アラビア語で「マグレブ」と呼ばれている。マグレブとは「西方」や「日の没する大地」の意だが、中高年の言い方をすれば、「カスバの女」の国。カサブランカに戻る夕暮れの車中、「ここは地の果て　アルジェリア、どうせカスバの夜に咲く…明日はチェニス（チュニジアの首都）かモロッコか…」との哀愁も思い起こすが、日出国から来た私は、アフリカの西の端、日の没する大地からの風景を眺めながら、かつての「カスバの女」のこの地は、3国とも今では一人当たりのGDPがアフリカ内では大きい。これからもモロッコは、ヨーロッパの玄関口として大きく経済成長するだろうと考えた。

スークの風景

その他の訪問都市など

①カサブランカ

人口385万人を超える商業の中心地。1907年のフランスによる占領後、急速に近代化が進んだ。

②ラバト

首都ラバトは大西洋に面し、ヤシの並木などが立ち並ぶ緑豊かな「近代庭園都市」。

③タンジェ

モロッコの海の玄関口で、城壁に囲まれたメディナ、地中海を望む白い街並みが続く。

更に四方山話を続けると

④タクシー

視察バス車内からタクシーを見下ろすと、後部座席に必ず多くの人が乗っているのが目につく。聞けば、モロッコにはプチタクシーとグランタクシーの2種類があると言う。プチタクシーは市内を走る小型タクシーでメーターが付いている。

一方、グランタクシーは、ベンツなどの大型タクシーで、町と町の間を往復している。6人乗りで、人数が集まると出発する。通常は後部座席に、やや斜めに構え4人座るが、時として後部に5人乗っていることもある。料金は6人乗車が基本であり、3人で乗車しても6人分支払う。

⑤モロカン

モロカンとは、「モロッコの」という意で、他のアフリカ諸国と異なり、中近東やヨーロッパ文化の影響を受け、独自の雰囲気を醸し出しており、日本でも話題となっている。革のスリッパ「バブーシュ」、衣類などの革製品を始め、オイルやアクセサリー、更には「クスクス」・「タジン」などの料理もモロカンスタイルとして人気を増しているそうな。私の自宅近くにも「クスクス」と言う名の小さなレストランがあるほどだ。

おわりに

変貌する4都市を視察したモロッコの印象は、旧市街と新市街が区分けされ、歴史的建造物や遺跡などの観光資源がきっちりと保存されており学ぶべきところは多い。更に、経済面では街の活気からして10%を超える人口増加を背景とするアフリカ市場で、そのリード役として、大きく発展していくだろうと確信した。

モロッコ王国の概要

面積：約46万㎢で日本の約1.2倍（西サハラを除く）

人口：約3,086万人

気候：アフリカとは言え気温は日本と大差なく平均すると日本より温和で過ごしやすい。

スペイン観光事情について

八千代紡織
部長　三友　哲哉氏

スペインの概要

スペインは、ヨーロッパ南西部のイベリア半島に位置し、国土の総面積は505千平方㎞に及び、ヨーロッパ大陸の中でも、ロシア、フランスに次いで3番目に面積の大きな国です。また西にポルトガル、南にイギリス領ジブラルタル、北東にフランス、アンドラと国境を接し、飛地のセウタ、メリリャではモロッコと陸上国境を接します。本土以外に、西地中海のバレアレス諸島や、大西洋のカナリア諸島、北アフリカのセウタとメリリャ、アルボラン海のアルボラン島を領有しています。自然環境、気候、文化、そして生活習慣が地方毎に異なり違いが明確な国です。首都はマドリード。2009年のGDPは約1兆4640億ドル、大都市部を別として人口は沿岸部に集中し、内陸部では減少する傾向にあります。

アルハンブラ宮殿にて

スペインの歴史について

イベリア半島にはBC10世紀頃からAD8世紀頃までにさまざまな民族が侵入してきました。その結果、人種的交わりをもたらされた各々の文化遺産は、スペインに絶大な影響を残しています。

スペイン統一は1492年イサベルとフェルナンド・カトリック両王によって成され、またコロンブスは新大陸を発見し、これを契機にスペインはめざましい繁栄の時代に入ります。ハプスブルグ王家にカルロス5世とフェリペ2世の時代が絶頂期で、世界の海を制する大帝国にまでなりました。

しかし、1588年の無敵艦隊の敗北後、国力は急速に衰退していきました。18世紀にはブルボン王家の統制下に入りましたが、1808年のナポレオン軍の侵入の際は、民衆をあげての抵抗を示しました。19世紀には新大陸の植民地のすべてを失ってしまいます。スペイン内戦（1936年～1939年）後、40年近くもの間フランコ政権の独裁が続きます。ピカソもこの期間創作活動をかなり制限されたそうです。フランコの死後、フアン・カルロス1世が元首となり、立憲君主制のもと、スペインの民主化は進み現在に至っています。

スペイン料理について

スペイン旅行の大きな楽しみの一つは、何といっても料理の美味しさです。そのバラエティーは世界的に定評があると思います。色々と調べてみると厳密にはスペイン料理というものは存在せず、それぞれの地方の気候や生活様式に多大な影響を受けた多くの地方料理が存在しています。視察団が訪問したアンダルシア州（マラガ、グラナダ市）の料理は、この地に浸透した多くの文化の影響を受けています。この地域の風土を反映して、地元で取れる野菜料理、冬期の煮込み料理、羊飼い料理や沿岸部の地中海料理、アラブ文化の影響を受けた菓子類があります。

日本の食習慣と異なり、スペインでは、一日に5回食事をすることで有名です。

1、デサユノ：朝食。起きがけに摂る食事（パンなど）

2、メリエンダ・メディア・マニャーナ：朝の軽食。午前十一時頃（サンドイッチ、タパスなど）

3、アルムエルソ：昼食。一日のメインの食事で午後2時頃（フルコース）

4、メリンダ：夕方の軽食。午後6時頃（タパス、おやつなど）

5、セナ：夕食。午後9時頃（スープ、サラダなど）

また、スペインといえばワインが美味しいことで有名です。ローマ時代にブドウの栽培技術が伝えられて以来、世界有数のワイン産地となり、優れた品質で高い評価を確立しています。ワインの生産地は、国内で60地域に上り種類は豊富です。訪問地のアンダルシア州は、シェリー酒が特に有名です。中でも「ヘレス・デ・ラ・フロンテーラ」という銘柄はこの地方で一番に挙げられているそうです。辛口から甘口（フィーノ、マンサニーヤ、アモンティヤド、ドルセ、オロロソ）まで味のバリエーションが豊富です。

スポーツについて

記憶に新しいと思いますが、2010年の南アフリカ大会で初めて決勝進出し、オランダ代表との延長戦の末、初めて優勝しました。日本もベスト16に進出して大変盛り上がったワールドカップでした。スペインではサッカーが最も盛んです。スペイン代表はFIFAワールドカップに13回の出場を果たしています。1998年のフランス大会予選の時に「無敵艦隊」と呼ばれ、以後そのように呼ばれることもあるそうです。また、最高成績は1950年のブラジル大会の4位と「永遠の優勝候補」と揶揄されることもありました。

国内のリーグ戦であるリーガ・エスパニョーラは、世界各国の有力選手が集結し、イングランドやイタリアのリーグと並んで注目を集めています。特にFCバルセロナ対レアル・マドリードの対戦カードはエル・クラシコと呼ばれ、スペイン国内では視聴率50％を記録したこともあり、全世界で約3億人が生放送でTV観戦する盛り上がりかたです。スペインのスポーツ観戦も楽しみの一つと言えそうです。

おわりに

リーマンショック以降まだ経済成長が、本格軌道に乗らない状況の下、日本のみならず、スペインにも雇用面で深刻な状況があることを感じました。

グラナダの視察で、肩に張りを感じたため、宿泊したホテルでマッサージの施術を受けました。施術していただいた方はまだ25歳で、色々と話をしていると、グラナダ大学で卒業したものの、いい就職口が見つからず、マッサージ学校で勉強して今の仕事をしているとのことでした。ただラテン人特有の根っからの明るさで頑張っている様子でした。閉塞した時代だからこそ、私も見習うべきところがあると思いました。

ドイツの観光事情について

税理士法人優和
公認会計士・税理士　飯野　浩一氏

今般は平成22年度埼玉県経営者協会・社会経済視察団に参加させていただき、利根団長を始め参加者の皆様にお世話になり心からお礼申し上げます。

私のレポートのテーマは、ドイツの観光事情でありますが、今回訪問したベルリン、ポツダムを中心にご報告致します。

（ドイツの歴史）

9世紀、フランク王国カール大帝の死後、東西フランク王国に分裂し、10世紀、東フランク王国はドイツ王国となりました。962年ザクセン公国から出たオットー1世が、神聖ローマ皇帝に載冠され、ドイツ人による神聖ローマ帝国は誕生し、ナポレオンにより解体される1806年まで存続します。その後、1871年プロイセン王ヴィルヘルム1世がドイツ皇帝として即位し、ドイツ帝国が誕生します。

1918年第一次世界大戦に敗れ、ワイマール共和国が誕生し、巨額の賠償金やインフレに苦しみましたが、首都ベルリンは周囲の都市を併合して人口370万人の大ベルリンとなり、ヨーロッパ最大の文化芸術都市として「黄金の20年代」を迎えることになります。しかし、1929年世界恐慌の嵐が吹き荒れ、ヒトラー率いるナチスが政権を握ると、オーストリアを併合し、ポーランドやチェコへ侵攻、第二次世界大戦が勃発し、600万人のユダヤ人が強制収容所で殺戮されます。1945年ベルリンは陥落し無条件降伏でドイツは敗戦を受け入れます。同年のポツダム会談により、米英仏ソの連合国側四カ国に分割占領されることとなりました。

1949年米英仏占領地区にドイツ連邦共和国（西ドイツ）、ソ連の占領地区にドイツ民主共和国（東ドイツ）が成立しました。1961年東ドイツは東西ベルリンの境界に壁を築いて交通を遮断しました。ベルリンの壁の誕生です。

1985年ソ連書記長ゴルバチョフによるペレストロイカは、東西間の緊張緩和をもたらし、ワルシャワ条約機構が解体され、東ドイツにおいても民主化要求が高まり、1989年11月9日夜ベルリンで突然の大量越境が起こりベルリンの壁が崩壊しました。その後、1990年東西ドイツは統一され、現在ではEU加盟国の中心的役割を担っています。

（ドイツ連邦共和国の概要）

議会制民主主義の16の州からなる連邦国家
首都：ベルリン
面積：35万7、104平方km
人口：8、230万人
観光客数：24、886千人
（日本8、351千人　08年）
観光収入：40、018百万$
（日本10、821百万$　08年）

（ベルリン及びブランデンブルク州ポツダム）

今回は、単独で州としての行政権限が認められているベルリン市とベルリン市を取り巻き、ポツダム市を含むブランデンブルク州を訪れました。日独交流150周年、東西ドイツ統一20周年、1999年以来のブランデンブルク州と埼玉県との姉妹州ということから、上田埼玉県知事の初の訪問とともに、各施設や各ミッションに参加させていただきました。

[ベルリン市]

ドイツ最大の都市であるベルリンは、旧西ベルリンの中心街であったクーダム周辺、東西ドイツ統一後に再開発されたポツダム広場周辺、ウンター・デン・リンデンと博物館の島周辺に見どころが分かれます。クーダム周辺は、「壊れた教会」といわれるカイザー・ヴィルヘルム記念教会、戦勝記念塔ジーゲスゾイレ、シャルロッテンブルグ宮殿などがあり、ショッピングする人々でも賑わっています。ポツダム広場周辺は、絵画館、フィルハーモニーなどが見どころです。ウンター・デン・リンデンと博物館の島周辺には、ブランデンブルク門、ペルガモン博物館、テレビ塔などがあり、多くの人で賑わっています。

ベルリンは、神聖ローマ帝国時代、プロイセン時代、ナチス時代、また東西ドイツ時代の東西両ドイツなどの様々な観光資源に触れることができるという魅力があり、また伝統的な文化芸術や先端都市の魅力も味わうことができます。一方で、現地日本人ガイドによる話では、東西ドイツ時代の東ベルリンは東欧諸国への窓口であり国際的な企業がこぞって拠点を置いていたのとは様変わりし、特にEU統合後のベルリンの国際的なビジネスにおける地理的重要性は大きく低下しているということでした。

ベルリンには現在2つの空港があり、大半の便が発着するテーゲル空港はベルリンの中心部から鉄道でも車でも20分程度の至近な距離にあります。もうひとつのシェーネフェルト空港は、拡張工事が進行中であり、新たなターミナルビルと滑走路を建設し、2011年10月頃に完成予定となっています。完成後は、新たな空港としてベルリン・ブランデンブルク国際空港と名称が変更され、テーゲル空港は閉鎖される予定です。

世界の主要都市との直行便の開通や増便などによって、経済面での活性化が大いに期待されている一方で、現在のベルリン及びブランデンブルク州のEU連合内での経済的な優位性の低さから、厳しい見方もされているようです。

[ブランデンブルク州]

人口：254万人（07年）
一人当たりのGDP：
2万678ユーロ（07年）

[ポツダム市]

ブランデンブルク州の州都
人口：15万4千人（09年）
ベルリンの南西に位置し、鉄道で30分程度の距離にある古都で、エルベ川の支流のハーフェル川や、多くの湖と森に囲まれた美しく静かな街です。かつては東ドイツに属していましたが、多くの城館と庭園を有する世界遺産の街として、また近年ではベルリンで働く高額所得者の高級住宅街としての性格も帯びてきているそうです。主な見どころは、プロイセン王フリードリヒ大王が建てたサンスーシ宮殿と庭園、米英ソによるポツダム会議が行われたツェツィーリエンホーフ宮殿、ポツダム映画博物館、スタジオバーベルスベルクなどです。

サンスーシ新宮殿にて

（おわりに）

報告書作成にあたり、ドイツ観光局のウェブページを参考にさせていただきました。我が国の観光庁、日本政府観光局のウェブページに比較し、マーケティング志向が徹底され、旅行者向けに制作されおり、この点日本も大いに参考にするべきではないでしょうか。

今回の視察で、ドイツ始め各国の社会経済情勢について学習し、実際に現地を見て人々と触れ合うことでさらに理解を深めることができました。あらためて関係各位に感謝申し上げます。

視察スナップ

▶外尾氏とサグラダファミリアにて

▶ベルリンの壁を背景に

▶サンスーシ新宮殿

◀カサブランカにて

▲バルセロナの夕暮れ

▲ベルリンフィルにて

▲FC バルセロナクラブバス